
隻眼の黒蠍召喚師

Mad-Hatter

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

隻眼の黒蠍召喚師

【Nコード】

N7347R

【作者名】

Mad-Hatter

【あらすじ】

やる気皆無な皮肉屋の喰えない男子高校生・貴蔵 劫と鴉名 令嗣。

『最凶』と『最強』が飛ばされた異次元は、銀灰色の空に三つの月が浮かぶ《銀世界》だった。《政府》《古刃連盟》《MAD機関》の三大勢力を中心に、徐々に混沌へと導かれてゆく異世界。様々な事件に巻き込まれていく内に、自らの世界と銀世界、ふたつの世界を揺るがす秘密に辿り着いて――。

【ミステリアス×最強】な主人公達による異世界冒険譚。

【 i 】 超越。

『《那由他路》へようこそ。《蒼き鷲》の諸君』

急変はいつも唐突にやってくる。

『《銀世界》の果てへ行け。黒蠍の聖霊具を忘れずにな』

そう、嫌になるほど唐突で、そして同程度に面倒でもある。

『君は君を殺さなければならぬ。——そうしなければ君は死ぬ』

やれやれ……。まったく、頼むから少し休ませてほしいね。

「……劫、起きろ。……劫」

TaTaNa-TaTaNa、と弾む音に合わせて振動する列車。

低く落ち着いた男の声で目を覚ました僕は、もたれ掛かっていた座席から身体を起こす。

寝ぼけ眼を擦りながら前を見ると、学生服に身を包んだ男が呆れ顔でこちらを見遣っているのに気が付いた。

「もうすぐ駅だ。……俺としては終点まで旅してくれた方がいいんだが？」

男は至極冷淡にそう言い放った。僕が欠伸を噛み殺しながら、

「またまたー。起こしてくれたって事はそんなつもりはないんですよ？」

微笑みながら言うと、彼は途端に渋い顔になって視線を逸らす。

「やはり、俺はお前が苦手だ」

「……買い被りすぎだよ」

苦笑してみせると、男はフンと鼻を鳴らし、苦虫を噛み潰したような顔で窓の外に目を向けた。

乗客は僕達以外いない、空席ばかりの午後十一時二分発列車。その中で吊り輪を握る目の前の男はどこか異様な雰囲気を漂わせている。

僕の幼馴染みで数少ない友人であり——まあ、向こうはそうは思ってくれていないようだけど——、飛鳥賀の名家・鴉名の若き頭首、からすなれいし鴉名令嗣。

すらりとした長身、切れ長の目に憂いを帯びた静かな瞳。短めの髪は軽くなでつけられ、鴉の濡れ羽のように黒い。薄い唇は不機嫌なのかと思うほど堅く結ばれていた。

規則通りに着た制服に、赤く陰陽の模様が入ったネックウオーマーが映える。

冷静沈着で頭脳明晰、抜群の身体能力。

まさに完璧という言葉が一番の形容であるこの鴉名令嗣は、唯一の苦手なものが僕だと明言していた。

買い被りすぎだけだね。

僕は平凡のかつ一般的な、眠ることが好きなただの男子高校生だ。飛鳥賀きつての秀才に嫌われるほどの実力も存在感も皆無である。

そんなこんなで僕が令嗣を観察していると、制服の内側、脇腹の辺りに僅かな膨らみを見つけた。

身体の線に沿って、拳三つ程度の大きさの膨らみ。

まさか。

いや、まさかそれはないと思うが、一応。

「令嗣。君、制服に短刀とか仕込んでないよね？」

僕からは側面しか見えない令嗣の顔に動揺が走る。

普通の人からは全く悟られないだろうが、付き合いの長い僕にはお見通しだった。

「なっ……何のことが分からないな」

お見通しなのに、令嗣は驚くべき事に白を切った。

真顔で台詞をつつかえてる奴はそうそくない。

まあ、暇つぶしにはなるかな。

心中の悪魔が囁くままに、僕は笑顔を浮かべて言う。

「『江戸時代より飛鳥賀に名を馳せる名家・鴉名、第十二代頭首が銃刀法違反で逮捕』……なんてね」

「な……！」

令嗣はまず慌て、次にきつと僕を睨み——数秒の沈黙の後、観念したようにうなだれた。

忙しいな。

思わず笑ってしまう。時々令嗣からは、どこか小動物のような印象を受けるのだ。

何をにやついているんだと言わんばかりに彼は僕を鋭い視線で貫

くと、

「何が望みだ」

とだけ短く吐き捨てた。

「うん。じゃ、それ見せて」

苦々しそうな顔のまま懷の内に手を入れ、紫の布に包まれたセンチ程度の物体を僕に渡す令嗣。

受け取って布を解くと、鴉の紋様が入った鞘に、薄紅色の柄を持つ短刀があらわになった。

「へえ……！」

思わず感嘆の声が漏れる。

鞘に描かれた鴉は鋭い目付きで右方を凝視し、くちばし嘴に二本の短刀をそれぞれ逆向きに咥えていた。

左翼は神に抗うかのように大きく広げられ、漆黒の羽は宙を切っている。

そして何より、その鴉は実に優雅で——美しかった。

「洒落たデザインだね。流石『きょじつ暁鴉』の愛した名刀だ」

令嗣の少しつり上げられた、男ながら柳眉と言いたくなるほど整った眉が揺れる。

それから再び渋い表情を浮かべると、唇を不機嫌そうに歪めながら言った。

「知っていたのか」
「まあね。前に調べたことがあって」

——『曉鴉』。

遡っては江戸時代、徳川に忠誠を誓った暗殺専門の忍しのぶである。
深い紺色の装束に身を包み、暗闇を駆け命を裂いたその冷酷無比な暗殺者は、銀で作られた『月』と黒曜石で作られた『夜』の二本の短刀を獲物に、数多の人間を闇に葬ったと言われている。
そして彼の一族『鴉名』は、飛鳥賀の大資産家として現在に至るという訳だ。

表舞台に上がることはまずない名だが、調べれば少々の文献は見つけることが出来た。

彼の血を受け継いだ令嗣も、暗殺術や格闘術は並大抵ではない——それはこうして傍らにいる平凡な男子高校生でも察知できた。

彼が実際に家業としてそういう仕事をしているのかどうかは、僕は知らない。

まあ、仮にそうであっても僕の令嗣を見る目は別に変わらないだろうけれど。

「どうした、呆けた顔をして。もう気が済んだなら返せ」
「あ、いや。もう少し」

結構再び刀に目を落とす。

短刀の柄を握り、鞘から少し引き抜いてみると——鈍く輝く黒い刀身が姿を覗かせた。

「黒曜石……なら、これは『夜』かな」
「そうだ。江戸から伝わってきているとは思えないほど切れ味は良い。扱いには気をつけろよ」

事実、『夜』は恐ろしいまでの鋭さを誇っていた。

黒曜石は自然のままの姿を残しつつ、極限までの軽さと鋭利さが追求されている。

名工により幾度と研磨されたであろう刀身の輝きは、僕にどこか畏怖の念を抱かせた。

「『月』も持つてるの？」

問いながら、『夜』を布に包んで令嗣に返す。それを愛おしそうに受け取って、令嗣は低く呟いた。

「いや、現在『月』は行方知らずだ。……父の失踪と同時に紛失してな」

令嗣の父という言葉には、敬意や愛情といったものが完全に欠落している。

まるで小石を眺めているような、空虚で哀しい瞳だった。

彼の父・鴉名断嗣は息子が五つにも満たない内に失踪した。

何の前触れもなく、書き置き一つ残さずに。

以来、搜索は続けられてきたのだが、未だ手がかり一つ見つかっていない。

……昔、令嗣に見せて貰った写真に映っていた親父さんは、到底家族を置いていなくなるような人には見えなかったのだけだ。

「ふん、暁鴉といい父といい、俺の家系は唐突に消えるのが好きらしい」

令嗣は黒曜石の短刀を懷に仕舞いながら、吐き捨てるように言った。

実に当たり前のことのような彼の発言だったが、僕は多少なりとも驚く。

「え……暁鴉も行方不明になったんだ」

「ああ。家に伝わる文献に、享保二年に突然消えたと記録がある。

もつとも、そこには『神隠し』に遭ったのだと述べられていたがな」

「神隠し……」

「すまないが」

令嗣は床に目を落としたまま、だがはつきりと呟いた。

「この話は止めにしないか」

「あ……そうだね。ごめん」

僕は曖昧に頷きながら、少しデリカシーに欠けていたかなと反省する。

話題を変えなきゃな……。

数秒熟考するが、特に何も浮かばない。実に頼りにならない頭だ。無能であり、無脳である。

何を考えているのか、俯いた令嗣の顔は曇るばかり。いたたまれない静寂が車内を包む。

と、とりあえず何か言わないと。

思った矢先、令嗣がちらとこちらを見て少し笑った。

「どうした、疲れが出てきたのか？ 学校では随分奔走していたよ
うだが」

「え？」

そつえば身体が怠い。

学生にとって身体の怠さと常時の眠さは付きものだが、どうも一

段と激しいようだ。

ああ、今日は文化祭の準備に走り回っていたんだっけか。

明後日に控えた飛鳥賀高等学院文化祭、僕と令嗣の学級・二年C組は喫茶店をする。

僕は趣味で上達した珈琲作り担当、令嗣は顔が良くて他学級の人にも人気があるからウェ이터だ。

ちょっと羨ましい気もするが、僕は絶対に接客なんて出来っこないから仕方がない。

ちなみに令嗣の給仕服姿は、そのまま料理店に行っても通用しそうな程に似合っていた。

教室の飾り付けや材料集め、何だかんだで気付けば日はとうに暮れ、こうして夜遅い列車で帰路についているという訳だ。

というか僕……今日の出来事が思い出さないと出てこないってどういうことだ……。

若干の精神的損傷を受けながら、疲れているからだろうと結論づける。

そろそろ床についてゆっくり休みたいところだけど。

「駅……まだ着かないのかな」

胸元にある黒い蠅ハエのネクレスを弄びながら呟く。

吊り輪に手が同化したように直立で一律不動のままの令嗣は、かすかに眉をひそめた。

「む……。先程西飛鳥を通過したはずだが。その時にお前を起こしたからな」

西飛鳥駅は僕たちが降りる飛鳥賀駅の、ひとつ手前の駅だ。

両駅間は五分程度しかかからないはずだけど、既に僕が目覚めて十五分以上は経過していた。

「トラブルか？」

「さあ、どうかな。普通に進んでいるみたいだけど」

首を傾げていると、突然目が眩んだ。

見れば、僕の身体は淡いスカイ・ブルーの光に包まれ、まばゆく輝いている。

「何だ、これは……！」

令嗣も同じように、青い光の渦の中心に立っていた。

光は僕達を浄化していくように静かに輝きを増し——視界が空色の輝きだけに染まった時。

僕達は時空を超えた。

【 i i 】 戦慄

「ど……こだ、ここは……」

令嗣が独り言のようにぼつりと呟いた。

いや、事実独り言なのだろう。その問いに僕が答えられるとは、彼も思っていないはずだ。

下校途中、僕達が列車から突然飛ばされてきた異世界――。

断言しておくが、そこは異世界という言葉から想像できるファンタジックなものとはほど遠かった。

まず、広さでいえばどこかの豪邸の応接間程度か。部屋としては申し分ないが、『世界』と表現するにはいささか壮大さと迫力に欠ける。

ついで蔦の絡まった古城や未知なる野生動物が闊歩する草原どころか、人間一人、草木の一本も存在していなかった。

では何故、僕がそこを異世界などという空想的で非科学的な分類の中に認知するのか。

球体だっただからだ。

内側が空洞のボールの中に入り込んだような感覚。

床は赤と黒のタイルでチェック柄に敷き詰められ、視界のありとあらゆる所を這うように覆っていた。

さらに重力は常に球の外側に向かって、床に対して垂直にはたっている。

それはこの場が地球上にないことの証明でもあったし、頭上の物質が落下せずに天井に張り付いているという異様な状況の原因でもあった。

いびつな形の小さな扉、底の見えない程の深い穴、大小がまちま
ちのランプ、壊れたオルガン。

どこからか聞こえるクラシックは時折音がとび、深い穴の奥から
子供の笑い声がねじれたように響く。

実に多様な『奇妙なもの』が散らばる、乱雑な『異世界』――。
その中心に置かれたS字に歪んだ一際大きなテーブルはお茶会の
準備が整っていて、僕達はそこに用意されていた古びたアンティ
ーク調の椅子に腰掛けていた。

「さしずめ、俺達はアリスといったところか……？」

令嗣が自嘲気味に笑った。既に持ち前の冷静さを取り戻し、周り
を鋭く観察している。

精神面においても、やはり令嗣は常人ではない状況処理能力を兼
ね備えていたようだ。

彼がどうにもならないことに対して感情的に取り乱すことは決し
てない。

ワンダーランド
不思議の国、ね……。

そのファンシーな彩りとミステリアスな雰囲気は、確かにルイス・
キャロルの『不思議の国のアリス』を彷彿とさせる節がある。

「不思議の国か……じゃあこれから始まるのは――」
マッド・ティーパーティー
「気違いのお茶会……その通りです」

僕の言葉はまだ言い終わらぬ内に遮られた。いや、継がれたと言
うべきか。

身を強ばらせてテーブルの向かいに目を遣る僕と令嗣。

ひとりの男がティーカップに口を付けていた。

——先程までどこにもなかった椅子に、どこにもいなかった男が。

僕と令嗣を取り巻く空気が、一瞬にして戦慄する。

「しかし『不思議の国』とは頂けませんね。それは貴方達の世界からの物言いです。違いますか？」

男は大きなシルクハットを斜めに深くかぶり、その表情はこちらからは窺えない。

首もとの蝶ネクタイはくすんだ黒色で、中地の赤い襟が尖ったダークマントがどこかドラキュラ伯爵を連想させる。

彼の身につけているものは殆どが長く使われてきたような古さがあり、所々に傷も見られたが、ほっそりとした手に嵌められた純白の手袋は新しさと清潔さを保っているようだった。

「ですが貴方達は客人——無礼な扱いはわたくしたちの沽券に関わります」

よく通る静かな声はその装いに似合わぬ程に若々しく、

「《那由他路》へようこそ。《蒼き鷲》の諸君」

どこかこの場を愉しんでいるかのような——そんな響きを含んでいた。

鉛のような沈黙が場を支配する。

お互いを探り合うかのような、張り詰めた時間が流れた。

果たしてそれが数秒だったのか、数分だったのかは良く覚えていない。臨戦態勢に入った人間は、大抵こういった時間に関する感覚が鈍る。代わりに研ぎ澄まされた五感、目のシルクハットの男に全て向けられていた。

男は左手でテーブルに頬杖をつき、右手に持ったティーカップを楽しげに揺らしている。

目端で捉えた令嗣の顔は、少なからず緊張の色を帯びていた。

それは男の唐突な出現によるものではなく、おそらく強敵に對しての本能的なそれがあるのだろう。

——コノ男ハ危険デアル。

「ふふふ、そのような強ばった顔はおやめ下さい。あ、紅茶はいかがですか？」

沈黙を破ったのは、男の愉快そうな笑い声と意外な言葉だった。

呆気にとられている僕達をよそに、彼は P a K i N と指を打ち鳴らす。

その音に反応して、テーブルに並べられていたティーポットがひとりでにゆらりと宙に浮いた。

ふたつのティーカップにのんびりと紅茶を注ぎ始めたポットがその役目を終わると、今度はティーカップが湯気を立ち昇らせながら宙をただよって移動し、僕達の前行儀良く並んだ。

令嗣は未だに訳が分からないといった様子で不思議なティーセットの一連の動作を眺めていたが、ひとつ小さく息をついてから臨戦態勢を解いた。だが、伏せた視線には警戒が色濃く残っているままだ。

「……自己紹介がまだでしたね」

前置きしてから男はすつと背筋を伸ばし、静かにカップを置いた。

「私はこの《那由他路》の主にして従者——《帽子屋》とお呼び下さい」

シルクハットのつばに右手をあて、恭しく一礼。

そして任務完了とばかりに満足げに二、三度頷くと、彼は再び美味そうに紅茶をすすり始めた。

え。いや、終わり？」

「ちょ、ちょっと待って下さい。えーと……《帽子屋》さん？」
「はい？」

《帽子屋》は『何でしょう？』とでも言うように首を傾げながら、自分でポットを取って紅茶を注いでいる。

「つまりここは異世界で——」

「貴方達の世界から見れば、ですが」

すかさず《帽子屋》の訂正が入る。
そこは譲れないんだ……。

苦笑しながら「そうですね、僕達の世界から見ても、彼は領いて先を促した。」

「僕達はこの世界へ招かれた、と。そういうことですか？」

《帽子屋》はシルクハットを押さえながら、少々大袈裟なくらいにかぶりを振った。

「いえ……確かに私は『客人』と言いましたが、この《那由他路》の客人ではありません。もともとこの《那由他路》というのは――」

「別にそれはどうでもいいんですけど」

「そんなことはどうでもいいんだが」

微笑みを浮かべた僕と苛立たしそうな令嗣がほぼ同時に口を開く。三杯目の紅茶を注ぎつつ、嬉々として話をしていた《帽子屋》は、不意を突かれたように身体を仰け反らせた。はずみで白いテーブルクロスに赤褐色の染みが広がっていく。

追い打ちをかけるように僕はテーブルに肘をついて目を細め、令嗣は腕を組んで目をつむる。

そして言った。

「早く元の世界に戻してください」

「さっさと元の世界に戻してくれ」

【 i i i 】 木霊。

《帽子屋》はまた気取ったように指を鳴らす。

乾いた音が響くと同時に、例によって今度は桃色の可愛らしい皿が現れた。

チョコレートソースからマーマレードジャム、更にはフルーツの盛りつけられたものまで、実に多種多様のクッキーがずらりと並び、小麦の焼けた良い匂いを漂わせている。

逆にいえばクッキーしかなかった。

アリスを茶会に招いた陽気な帽子屋に、クッキーが大好きという設定があつたかどうか考えてみたが、特に思い当たる節はない。

これは彼の純粋な好みのようなのだ。

彼はパイナップルが載っている一枚を取って、その香ばしさを感じさせる音を立てて嚙った。

「とりあえずお茶にはいかがですか？ 紅茶も冷めてしまいますし」

《帽子屋》がクッキーを咀嚼しながら言う。どこか声も弾んでいた。

「いえ、パイナップルのを狙っていたのもう結構です」

嘘だけど。

それよりも元の世界に、と僕が言いかけたところで、

「なんと……！ これは失礼を致しました！」

《帽子屋》が素つ頓狂な声をあげた。

クッキーが出てきてから無意味にテンションが高い。

乾いた音と同時に、無の空間からパイナップルクッキーが大量に載った皿が僕の目の前に構築される。

甘ったるいシロップの香りで目眩がしそうだ。

ここまでされれば断るのも悪い、のかな……？
試しに一枚食べてみる。

「……………」

これは、何とも。

パイナップルから腐敗した魚のような匂いがする。

シルクハットの下から覗く、僕が喜ぶ場面を心待ちにするかのような視線がただ辛い。

「微妙だったのか」

令嗣が正面を向いたまま小声で囁く。

「いやいや令嗣、これすごく美味しいよ。一枚といわず全部食べていいよ」

「……沈黙ってのはお喋りだな。それに俺は一枚たりとも食べないぞ」

令嗣がメープルクッキーを咥えながら鼻で笑う。

この令嗣の嘲笑を、僕は決して忘れないだろう。

「ところで、話を誤魔化そうとしても無駄ですよ」

紅茶で口直し——いや、喉の渴きを潤したところで《帽子屋》に向き直る。

「その通りだ。さつさと元の世界に戻して貰おうか」

令嗣がクッキーの半分を右手に持ったまま言う。

少し味が悪いくらいの程度ならば残さず食べる奴なので、おそらくメイプルの方も相当な不味さであったであろう事がうかがえた。
何だこの不味いクッキーシリーズ。

「あー……、あのですね。ひとつ伺ってもよろしいですか？」

《帽子屋》が目を伏せたままぼそりと呟いた。

「何ですか」

「お二方はこう、異常なほどに冷静……といいますが、動揺などが感じられませんので……」

ああ、と同時に頷く僕達。視線を横目で交錯させて、自嘲気味に笑い合う。

「ま……色々、あったからね」

「ああ。異世界に飛ばされました、くらいなら許容範囲だ」

「そ、そうですね。《蒼》もしばらく行かない内に、様変わりしましたね……」

こころなしかうなだれたようにする《帽子屋》。

僕達の方が変わってるって事は考えないらしい。

《蒼》というのが僕達の世界を示す言葉だとすると、なんだかその代表として申し訳ない気もする。

……いや、僕はごく普通だけど。

「さて……元の世界に戻せ、というお話でしたね」

手袋の白で一層細長く見える指をティーカップに絡ませ、静かにこの世界の主は語りだす。

「そうですね、結論から言いますと——」

《帽子屋》は勿体ぶるように一呼吸置いて、

「可能です」

と誇らしげに言った。

何か流れて『そんなの無理ですよ』なんて言いそうだったから、少し拍子抜けする。

「しかし……そうですね。まずこの世界について、知って頂く必要があります」

「《那由他路》、だったか？」

「ええ。那由他は多量の数を意味し、路は数多の世界に繋がる道を意味する……つまり、ここは中継所のようなものなのです」

世界と世界とを繋ぐ——中継所。

にわかには信じがたい。しかし、この《那由他路》自体が人知の遠く及ばない事を証明している。

……やれやれ、勘弁して欲しいね。

「私はこの《那由他路》の主人であり従僕。無限の世界の王にして奴隷」

《帽子屋》の声は低く世界中に巡り、響いて木霊する。

「《那由他路》が貴方達を呼び寄せた場合、直ぐにでも戻して差し上げることが出来ます。……しかし此度はそうではない」

……………。

何のことがさっぱりだ。

隣を盗み見ると、背筋が一直線に伸びている令嗣と目があつた。

「令嗣。この人が何を言っているのか、よく分からないんだけど」

「『私は皆様の従僕かつ奴隷です』——と言っている」

「違います！ 都合の良いように解釈しないで頂きたい！」

冗談だ、と令嗣は無表情のまま断ち切る。

自分で放つた冗談を、これほどまでに無慈悲に回収する男はそういない。

「つまり。今回は俺達がこの世界と繋がれているわけではなく……」

別の世界と繋がれているから、パイプの役割を果たすことしか出来ない、と。そういう事だな？」

「……その通りです」

「元の世界に戻すことについて可能ですと言ったのも、お前の力によつてではなく、結局はその別の世界についてからの話であると」

「……………はい」

困窮する《帽子屋》。令嗣の空気に飲み込まれて完全に萎縮していた。

プレッシャー

先程感じた圧力は何だったのか、ふと疑問になる。ただの過剰反応だったのではないかと。

……いや、それは僕の願望か。僕だけならともかく、令嗣もそれを感じて身を強ばらせたのだから。

あれは本物の——圧倒的な死の威圧感。
今は奇妙な帽子屋を気取ってはいるが……能ある鷹は爪を隠す、
ね。

令嗣に目配せをする。彼も同じ事を考えていたらしい、少し肩を
竦めてみせた。

G o w n、G o w n……。

突然、鐘の音が響き渡った。

壊れたテープレコーダーから流れ出るように、少し掠れた音が延
々と繰り返される。

「おや……時間のようですね」

「これは一体何の——」

何の合図ですか、と僕が問うつもりだった相手は、既にその席を
離れていた。

……いや、どこを見渡しても、シルクハットの男の姿はない。

湯気の立ち上るティーカップはそのままに。

鐘の音と入れ替わりのように。

《帽子屋》は消えた。

「茶会は終わりって事が……？」

クッキーの残りを口に投げ入れ、それを紅茶で飲み下してから、
令嗣は不敵な笑いを浮かべた。

【 i v 】 崩壊

《帽子屋》の消失は、《那由他路》の存在をより一層不気味にさせた。

無秩序と混沌――。

それは主を失った従者のように、あるいは兵士を亡くした王のように。

幼い子供のものと思われる笑い声、泣き声、叫び声が混ざり合い、陽気ながらもどこか気味の悪いクラシックがそれを包む。鳴り続く鐘の音は、全ての雑音を打ち砕いて突き抜け、ただ孤独に響き渡った。

「劫。……これは」

「うん。ここ、多分もうすぐ崩れるね」

《那由他路》自体の存在の揺らぎ。それを僕達は感じ取っていた。

『空間の崩壊』は、普通はまず感じる事が出来ない。

何故なら、三次元の存在にとって『空間の崩壊』は自身の消滅に直結するために、それを感覚として捉えることに何の意味もないからだ。一定以上の痛みが感じられなくなることに少し似ている。

だけど……一度『空間の崩壊』を経験することで、否が応でも感じるようになる。

とある知り合いの連続殺人犯は、この感覚を『メタ・センス』と呼んでいた。

少し前に起こった災難な事件に巻き込まれた僕と令嗣は、それを身につけてしまっていた。

しかし何度も言うように、三次元の僕達がそれを身につけていて

もどうしようもないわけで。

このままでは跡形もなく消え去ることは確定済みなのだ。

「令嗣、とりあえず何か手掛かりがないか探そう」

「ああ。俺は床の方を調べる。お前はそこらに散らばったやつを頼む」

「OK」

席を立ち、くまなく《那由他路》中を歩き回る。

滑車の中をぐるぐる駆けるハムスターにでもなった気分だけど、こっちは回るのが滑車ではなくて僕達の方なのだ。重力は常に足下に向かってはたらいてくれるので、頭に血が溜まったりしないのが唯一の救いかも知れない。

G o w n - G o w n . . .

鐘の音はまだ鳴り続けている。これは脱出と何か関係あるのだろうか。

しばらく音源を特定しようと歩き回ってみるが、結局どこは特定できない。

世界の外側から響いてきていた。

何かの位置を教えてくれるものでないとすれば…… おおかた空間消滅の警鐘といったところか。

「……使えないな、おいっ！」

拳銃を突きつけてきた相手が『君、撃たれるよ』と言ってくれたような感じた。

オルガン、トランプ、ティーセット……色々と調べてみたが、ど

れも脱出には役立ちそうにない。

的を絞らなくては、時間切れになるほうが早いだろう。

せめて《帽子屋》のように瞬間的に移動が出来れば話は早いんだけど……。

「——瞬間移動？」

《那由他路》から別の世界へ——瞬間移動。

あれは《帽子屋》の特権のような感じがしていたけど……。
いや、そもそも。

《那由他路》の住人だからといって、別の世界へワープできる能力はあるのか——？

「まずいな……崩れるまであと三分つてとこか」

丁度僕の頭上の辺りに立っている令嗣がぼやいた。

地震のような揺れに加え、床のタイルがバラバラと剥がれ始めている。

空間の消滅の時が刻一刻と迫っていることを強く感じていた。

《那由他路》が世界規模として考えれば狭いにしても、床をめくるには広すぎる。

令嗣もかなりの数のタイルを引きはがしてきたのだろうが、顕わになったフローリングの床はまだ全体の三分の一程度だった。今までのところ、それらも手掛かりになりそうはない。

……やれやれだ。

すっかり冷め切った紅茶を一口飲み、僕は溜息をつく。

「劫……？ 貴様何をしてるんだ……？」

鷲名令嗣の殺意の波動は背筋を凍らせる。

「まっ、まあまあ令嗣、パイナップルクッキー、食べない？」

先程まで茶会が開かれていたテーブルに腰掛けながら、令嗣に笑いかける。

しかし令嗣は懐の短刀《夜》のように鋭利な視線で僕を射貫き、静かに佇んだまま動かない。

……まずい。このままでは《那由他路》崩壊より先に、令嗣に殺^やられかねないな。

《帽子屋》を真似て、咳払いを試みる。

「令嗣。《帽子屋》はこのテーブルに突然現れたよね。そしてここで……消えた」

「……？ 何を言っ——」

「ある世界の一住人に過ぎない彼が、《那由他路》の中でならともかく——他の世界にまで瞬間移動できるとは思えない。何らかの移動手段、つまり媒体を使ったと考える方が自然だと思わないかい？」

「……………」

顎に手を当てて俯きがちに僕の話聞いていた令嗣が、やがては
つとしたように顔を上げた。

「……手伝ってくれる？　ひとりじゃ厳しいみたいでさ」

僕は手の甲でテーブルを叩いてみせた。

こちらに駆け寄ってくる令嗣は、すでに激動と言ってもいい地面
の揺れに少しも危うくなる様子はない。床に所々開き始めた穴の向
こうには、漆黒の闇だけが冷たく広がっていた。

そろそろ空間崩壊も最高潮だ。

「OK、準備は良いかい。いくよ、せえ……」

g o - G O T O N . . .

令嗣がテーブルに手をかけた時を見計らって僕が放った掛け声は
呆気なく無視された。

重低音を響かせながら、木製の厚いテーブルが令嗣ひとりの力で
引つ繰り返る。

いや、事が済めば別にいいんだけど……何か泣けてきた。

「フツ……馬鹿かと思えば、肝心なときには頭が切れやがって。…

…やはり俺はお前が苦手だ」

「買い被りすぎだよ」

裏返しになったS字型のテーブルの、丁度《帽子屋》の席辺り。
見たこともないような鮮やかさで割り貫かれている穴は兎の形で
——その向こうには、明らかにテーブルの厚みを超える空間が広が
っていた。中では七色の光がうねり、渦を巻きながらまばゆく輝い

ている。

空間と空間を繋げる、いわば転送装置。

——《白兔が賢しき者を更なる奇へと導かん》

「刻印がしてあるね」

「《帽子屋》の次の白兔か。順番が滅茶苦茶だ……だが、行くしかないようだな」

「うん、行こうか」

兎の形をした穴に手をかざすと、Fawnという柔らかい音がすかに響いた。

警鐘は既に止み、世界は諦めたように終焉の時を迎えようとしている。

《那由他路》崩壊、約二十秒前。

僕達はコバルトブルーの風に包まれ——白兔に導かれていった。

【 V 】 邂逅。

視界一面に、銀色が広がっていた。

それも光をそのまま反射して輝くような、金属的な銀色ではない。優しく陽を受け止めて、どこか儚げな雰囲気醸し出している銀の灰。

そんな色の空だった。

白い雲が、霞んでしまいそうなほどの高みでゆったりと泳いでいる。

その向こうに浮かぶ月は淡い青色と濃い橙色の二種類。僕達が見慣れている月と違って、日中においても確かな存在感があった。

暖かな陽射しを地表に浴びせる太陽は、銀の指輪のようにも見える。

「おお……まじごと事なき異世界だね……」

僕はどこかの草原に横になっていた。

うららかな陽気の中、ひやりとした草のベッドと微かに吹く風が心地よい。

しばらくの間、のんびりと空を眺めて過ごす。

色も雰囲気も違うのに、こうして空を見ていると落ち着いてくるのだから不思議だ。

海や山や空……荘厳な自然の前に立つと穏やかな気分になるのは、どこも共通らしい。

「令嗣、起きてる？」

むくつと起き上がり、隣に寝そべっているとばかり思っていた友人にそう声を掛けようとして。

そこで初めて、令嗣がどこにもいないことに気付いた。

「……………え」

ほとんど跳ね上がるように立ち、辺りを見渡す。

どこまでも続く草原は、一直線に続く地平線で銀の空と交わり、建物どころか人影すら確認できない。

《那由他路》で垣間見たものとは別の種類の、無。

「れ、令嗣……？」

Feow・・・と少し強めの風が吹いた。

「令嗣！。 いないのーっ？」

当てもなく辺りをぶらぶらと歩いて令嗣を探すが、まったく言っ
って良いほどに何の気配もない。

陽も徐々に暮れ始めていた。

「どこ行っちゃったのかな、令嗣……迷子？」

自分で言ってみて、デパートの人混みの中であたふたとしている令嗣を想像する。

ぱたぱたと手を振って必死に僕を探している脳内の令嗣に失笑。

「……って何を笑ってるんだ僕は」

脱力気味の自己突っ込みも、虚しく大草原に飲み込まれていった。歩き始めてから4時間も経つと完全に陽が沈み、夜の帳がおりた。いくら何も見つからない草原とはいえ、暗闇の中で歩き続けるのは危険だろう。

適当な岩を探して腰を降ろし、夜が明けるまで待つことに決める。少し眠ろつかとも思ったが、夜になってから急速に気温が下がってきていた。朝方にはどの程度の寒さにまでなっているか分からないし、目が覚めたら凍死していたなんて洒落にならない。

「今夜は寝たらずいかな……」

額の汗を拭い、夜空を見上げた。

限りなく広がる宇宙のキャンバスに散りばめられた、無数の星々。僕達の地球から見るよりもずっと数が多く、どれもが爛々と光り輝いている。

そして僕のほぼ真上に浮かぶ月は、どこか生命の明るさを感じさせる星々と対照的に、鈍く赤黒い光を放つ。

昼間に見た青と橙の月とは全く異なる、死を象徴するかのような三つ目の月。

「――！」

その月明かりに照らされながら、僕は《黒蠍》と邂逅した。

鋼の如き漆黒の甲殻は闇を吸収しながら、赤き月光に輝きを得る。その体軀は一般的な自家用車ほどはあろうか。何もかもを切り裂いてしまえるかのような鋭利な鋏は、肥大しているというよりはシャープな印象で、どこか日本刀を思わせた。尾は巨木を彷彿とさせる太さで、その先についた鋭い毒針は真つ直ぐに標的^{ぼく}を向いている。

——『蠍』。

果たしてそれをそう呼んでいいのか分からない。だけど、大きさや殺戮に特化された構造を無視すれば、その形は間違はなく死の蠍^{アフガン・デスストーカー}だった。

「……………」

呆氣にとられて、しばらく呆然と蠍を見つめる。

夜空に向けていた顔を下げた途端、視界に飛び込んだそれに対する思考処理が追いつかない。

貪欲に輝く赤き月を背負い立つ、巨大な黒蠍。

月を死の象徴とするならば、それはまさに死を具現化した存在。

「……………ああ、そうか」

だが——全く以て不思議な心持ちだった。

覚えたのは恐怖や戦慄ではなく、むしろ何か懐かしみのような何か。

自分でも訳が分からない。突然現れた『死』にこんな気持ちを抱くなんて、理解不能だった。

石像の如く不動のままの大蠍に歩み寄って、そつとその額に触れる。

Docn - Docn という生命の躍動が、蠍の内から僕の手を通じて僕に流れ込んだ。

「そうか……君は——僕なのか」

全く無自覚のうちにぽつりと呟く。

そうする事が必然であったかのように、口を突いて出た言葉。

黒き蠍の激しい咆哮が、夜空に響き渡り——次の瞬間には、その尾が僕の左胸を貫いていた。

最期に見た月の輝きは、哀しいほどに美しい深紅だった。

【Vi】 明澄

「……………ん……………」

窓から差し込む柔らかな朝日に、は目を覚ました。

線の細い華奢な体つきに、透き通る滑らかな白い肌、顎先が尖った端正な顔。

ベッドに長い川を作る、絹のように真っ直ぐな緑の黒髪。

陽の光を薄く照り返すネグリジェと相まって、遠目から見れば精巧な人形にも見える。

「……………朝か」

少女はぼつりと呟いた。

透き通った美しい声音でも、その調子は重く沈んでいる。

年頃の少女とはほど遠い、年老いた猫を思わせる物憂げで寂寥たる表情。

伏せられた切れ長の目はくつきりとして大きい、そのコバルト・ブルーの瞳に明るい光は宿っていない。ただ全てを諦めきったような静けさだけを帯びていた。

そして同時に、その目こそがユウイル・フィラゼルフニアという少女の象徴だった。

どこからか鈴を転がすような小鳥達のさえずりが聞こえる。

陽はまだ昇り始めたばかりだったが、大地はもう確かな生命の鼓動を刻んでいた。

機械的な動作で身体を起こし、顔を窓の外に向ける。

素朴な木枠の窓は朝霧に曇り、そこを透る日の光を幻想的に膨ら

ませていた。

ユウイルが窓を押し開けると、重く淀んだ空気がすつと消え去り、入れ替わりに新鮮な朝の風が吹き込んだ。

窓の向こうに広がる銀灰色の空は普段より一層澄み切っている。

「そうか……昨夜は」

言いかけて、忌々しそうに途中で口をつぐむ。

——マヌアス暗融月。

この世界の大空に君臨する三つの月のひとつである乾いた血のよ
うに赤黒い月は、その不吉な印象ゆえにミファル神話では死の世界、
聖戦黙示録では邪神の象徴とされた。

全く不定期に突如現れ、陽が差すところに跡形もなく消える——そ
の様子があたかも夜の闇に融けゆくようであるということからこの
名がついたと言われている。

だが暗融月が融けた翌日の空は、世界中の影を連れ去った後のよ
うに美しくなるのが恒例だった。

ユウイルは雲一つ無い空を睨む。

今頃は世界中の誰もがこの晴れ渡った空を眩しそうに見上げてい
るに違いない。

単なる朝のちよつとした良い出来事として、その意味も知らずに。
今はどこに存在するかも解らない魔界の月に唇を噛み締め、ユウ
イルは空から視線をはずした。

身支度を整え、大切そうに壁に飾られたダークブラウンのレザー
ジャケットを羽織る。

丈が短く、あちこちが傷と泥にまみれた古い上着は明らかに戦闘
用のそれだ。

染みついた硝煙の匂いと所々に空いた弾痕が戦場の気配を重苦しく漂わせている。

ジャケットの中では二本の銃帯が胸の前で交差するように掛けられている。ホルスター部分が背中側にまわっているために、銃そのものを確認することはできない。

髪をかき上げようとしたユウイルの白い手が上着の襟首についたバッヂに触れた。

朽ち果てた剣を護る、炎を纏った不死鳥をかたどっている。

それすなわち、世界で最も強大な組織のひとつ——《古刃連盟》加盟者の証。

連盟内での階級を表す剣は、そのバッヂには最高級階位『覇』を示す六本が描かれている。

「……これは私には必要ありません、父上」

丁重にバッヂを外し、かつてその持ち主だった父の遺影の前に供える。

「私は父上の復讐の為に——《古刃連盟》を崩壊させる事の為に引き金を引くのですから」

少女の瞳の深い闇に、冷たい怒りの感情が滲んでいた。

一面に背の低い夏草が広がり、地平線で空と交わる未開の地・『サトロ』。

草の匂いを運ぶそよ風と麗らかな陽射しが一年にわたって続く、

温暖な気候の土地である。

まるで人間という存在を完全に切り離れたかのような、自然のみによって構成された領域。

ある種の楽園に対する憧憬すら感じさせるが、その自然には異常な特性があった。

——動物が住まない。

住めないのではない。

実際、《政府》の研究者たちが地質から草の種類まで徹底的に調べた事があったが、結果は全くと言っていいほどに問題なかった。彼らはこの結論に首をひねり、研究報告書をこう締めくくるのだ。『野生の草食動物や鳥類が生息するのには最適の場所と言えるはずだ』と。

(……違つ)

サト口の唯一の住人である深い蒼色の瞳の少女はかぶりを振る。

(生命を寄せ付けない確固たる意志が必ず存在する)

彼女は広大な面積を誇るサト口といえども、自身以外には動物たちが住んでいないことを知っていた。

それはこれまでの十八年間でこの地で過ごしてきた彼女の経験であり、喜びであり、憂鬱だった。

(なのに——)

故に、ユウイルはその事実にただ慄然とするしかない。

(なのにこの匂いは……何?)

夏草の海に細波をつくる風にのった、鼻孔にまとわりつくような匂い。

大量の血液の匂いだった。

【 V i i 】 記憶。

「これは……」

ユウイルは僅かに目を細めた。

彼女が草原だけが果てしなく広がる故郷に目にしたのは、血塗れで仰向けに横たわるひとりの青年。

年齢は十六、七くらいか。

小柄な体躯に小さめの顔。おそらく実年齢より若く見られるタイプの青年だろう。

今は華奢な身体を包んだ黒一色の服も、色白の肌も血で朱に染まっている。

青年の辺り一帯に大量の血液が海を作り、ところどころに肉片や臓物が飛び散った痕跡があった。その中心となる青年の胸は大型の突撃槍で貫かれてもしたようにひどく破損し、もはや見る影もない。

「……どうということだ？」

職業柄、死体を見慣れているユウイルは、たいしてそれを見たときに衝撃は受けなかった。今まで見てきた死体には頭蓋が大槌で粉砕されたものや上半身が手榴弾の爆発で吹き飛んだものもあり、それらに比べればまだましな方だ。

それよりも、このサトロという地で人間の死体があるという事実
に彼女は動揺した。

（並の人間なら立ち入る事すら出来ないはずだが……）

ユウイルは厳しい表情になる。

一番の問題は、ここがサトロの中でもほぼ中心部に近いという事

だった。

サトロの特異な性質は、どこでも一定の圧力ではない。郊外近くならばその影響は微々たるものだが、中心部になると並の人間は立ち入る事が出来ないほどに強い。長らくサトロに住んでいるユウイルこそ耐えられるものの、普通ならば意識が混沌となり、得体の知れない力に押されて外へ向かって歩き始めている頃である。

（取り敢えずこれをどうにかせねばならないな。治安管理隊に応援を頼むか）

そう思い、ユウイルが上着の内から小型連絡用通信機ティルフィンを取り出す。いや、取り出そうとして、目があった。

——口から一筋の血を垂らしながら、微笑んでいる死体と。

「……えと、そこのお嬢さん。水を貰えると嬉しいんだけど……」

少女は眉一つ動かさず、ホルスターから銃を抜いた。

長い黒髪がふわりと舞った。

そして次の瞬間には、先程まで僕が寝転んでいた場所に的確に銃弾が撃ち込まれる。血溜まりが爆ぜるように飛び散った。

少女が両手に構えているのは、連射機能に優れた短機関銃らしい。今の数秒で大量の薬莢が辺りに散乱していた。銃を引き抜く予備動作もまったく無駄が無く洗練されており、ジャケットの内にある銃帯が目に入って咄嗟に横に転がったのが一瞬でも遅ければ、今ごろは蜂の巣だろう。

僕は転がった勢いで滑るように立ち上がり、取り敢えず両手を挙げてこちらに敵意がない事を示した。すっと滴った口許の血をさりげなくぬぐう。

「……過激だね、死ぬところだった」

彼女がぴたりと引き金を引くのを止めた。無言のままゆっくりとこちらに向き直る。

そしてそこで初めて、その少女と正対した。

腰程まである艶やかな黒髪はストレートにおろしてある。肌は色素が薄く透き通り、深窓の令嬢といった雰囲気だ。武装された恰好とは不似合いな美しい容姿だが、目だけには熟練された冷徹な暗殺者のような印象を受けた。

片方の機関銃を肩に据え、もう一方の銃口を僕に向けながら少女は言った。

「……ふたつ訊きたい」

無感情な冷たいコバルト・ブルーの瞳に、にこやかな微笑みで頷く。

「ひとつ。頭痛や吐き気があったり意識が朦朧としたりしていないか」

……あれ。心配してくれているのだろうか。

一瞬そんな事を思ったが、まだ微かに火薬の煙をあげている銃口を見て消去する。

横になっている初対面の人間に短機関銃を連射するような少女だ。一般的な会話は通じそうにない。

「ありません」

端的に答えると、彼女は一気に不審そうな表情になった。眉根がぐっと寄せられている。

もう、何か別な生き物を見ているような目だ。

もしかしてこの世界では、意識が朦朧としていないと変人扱いされるのだろうか。

……嫌だな、それ。普通のひとが正常なのか異常なのか解らないし。

「ふたつ。それは貴様の血か」

顎で僕の胸元を示す。見ればべっとりと血液が付着し、左胸の辺りは制服に大穴が空いていた。

そしてその穴を見た刹那、突如昨夜の記憶がフラッシュバックした。

一時的な記憶喪失から復帰する瞬間のように、大量の記憶が脳裏で荒れ狂う。

「……が、はッ……」

——夜。草。星。風。蠍。鋼。黒。赤。月。死——

「貴……、ど……した」

少女が何か言っているが、耳鳴りのせいでよく聞き取れない。頭が割れるように痛む。足元がふらつく。視界が点滅する。身体が燃えるように熱くなったかと思えば、凍えるような悪寒に襲われる。心臓は異常なリズムで激しく鼓動していた。

——心臓？

そうだ。あの暗鬱とした月明かりの下で、僕はあの巨大な蠍に胸を貫かれた。

自らがそれを望んでいたかのように奴に近づいて、それで——。

何故だ。どうして僕は、生きている？

そして思考がそこまで至ったとき、僕は意識を失った。

【 V i i i 】 監獄。

深い意識の底は、^{かび}黴とウイスキーの匂いがした。
生ぬるく湿気た空気が、戯れるように肌に絡みつく。
どろりとした闇が僕を包み、今にも飲み込もうとのどをうならせる。

僕は現世と隔離されたそこで、ただ与えられた感触のみを享受していた。

分厚い鋼の鋼殻を纏った、赤い月の化身。
あの大蠍に襲われて、僕は死んだ。

《那由他路》、《帽子屋》、《銀世界》、《黒蠍》。

「……ファンタジーってのはさ、羽根で出来てるから軽いんだよね」
生きているのか、死んでいるのか。
現実なのか、空想なのか。

「^{リアル}現実で塗り固められたら——飛べないっての」

目が覚めた時、僕はベッドに横になっていた。
ベッドと言ってもコンクリートの台に薄いシーツを被せただけの
簡素な作りで、ひどく硬い。
明確になった視界は一面が灰色の天井。四隅に黴が生え、全体的
にうつすら黒ずんでいた。

その中央にぽつんと吊り下げられたススだらけのランプは橙の光でぼんやりと辺りを照らしている。

「おお？ 目が覚めたか」

枕上の方から声がした。

獣のように荒々しい低い男の声。

あちこち痛む身体を起こし、ゆっくりとそちらに顔を向ける。

「よう、坊主。気分はどうだ？」

薄暗い廊下に、熊のような大男が腕組みをして笑っていた。

二メートル近くはあろうかという巨体。齢は四十を超えている風貌だが、筋骨隆々とした肉体に衰えは全く感じられない。短く切りそろえられた髪とびんにまで繋がった顎髭は濃いブラウンで、彫りの深い西洋的な顔立ちをしている。

深緑の軍服を着たその背には、自身の背丈よりも更に高い大斧・ハルバードが鈍く光っていた。

「気分？ 最低だね」

僕は男に苦笑を投げかけながら言う。

「……これが何かの冗談なら最高だけど？」

両手首にかけられた手錠の鎖が J a r a n と揺れる。

鉄格子の向こうで、牢の番人が豪快に愉快そうな笑い声をあげた。

「残念だが、最低のままみてえだな」

「さてと」

監守の男は岩のような手で顎髭を撫でながら、困ったように笑った。

恐らく監獄は横一列に連なっているのだろう。通路は僕の入られた牢を壁に横に伸びており、牢でない方の壁には所々明かりが灯っているものの、やはり暗い。地下なのか窓も見当たらなかった。

「色々と言いたい事もあるだろうが、少し待ってくれ。じきに本人が来る」

「本人？」

「お前さんを監獄（ごんかく）にぶち込んだ本人、だ」

男は再び苦笑すると、鉄格子に寄りかかって軍服の内から小さな酒瓶を取り出した。

コルクを歯で抜き、琥珀色の液体に口を付ける。微かにウィスキーの匂いがした。

「職務中じゃないの？」

「ん？」

僕が問うと、監守は肩越しに向けた顔に疑問符を浮かべる。僕の視線が彼の軍服に向いているのを見て、その表情がわずかに曇った。

「ああ、コレか？——ちよいと事情があつてな、今は軍人じゃない」

「そうなんだ」

まあ、この大男が軍人かどうかなんて僕が詮索する事ではないのだけれど。

僕はまた硬いベッドに横になって、今置かれている状況をまとめなおすことにした。

さて、まずここは何処だろう。

いやはや全くもって訳が解らないが、何故か監獄だ。だけど僕が気を失ったのは、見渡す限り地平線が続いていたあの草原。すぐ近くにこんな収監施設があったとは思えない。

とすれば、例の機関銃少女がどこかの組織に連絡をして、そこから派遣された部隊が僕をここまで運び込んだと考えるのが妥当だ。

ではその組織とは。

最も有り得るセンは、警察や救助隊。この世界にも僕達の世界と同程度の社会が営まれているとしたら、そういった公的な機関があるって当然だろう。

——いや、それなら今ごろ僕は病院にいるはずで、手錠をかけられて牢に入れられている訳がない。あそこが国家機密にでも関わるような所なら話は別だが、そういった訳でもなさそうだった。

ではどういう事だ？

.....。

認めたくないけど。

多分、かなり非法な組織に拉致監禁されているという事だろう。

「.....グルーデイス。例のあいつはどうだ？」

薄暗い廊下の奥から、石畳と擦れ合う靴音が近づいてきた。

それと同時に、少し前にどこかで聞いたような声。

「ああ、目え覚ましたぜ」

監守は鉄格子にもたれた状態からのつそりと体を起こし、道を空ける。

わしわしと顎髭を撫でながら、僕にいつと笑いかける。

——なにか可哀想なものを見るような目で。

「なんつーか……頑張れよ、坊主」

が……頑張れよ？

「……ご苦労だった。後は私が引き継ぐ、下がって構わない」

「了解」

同情を残して去った監守と入れ替わりに現れたのは、ひとりの少女。

「えっと、しばらくぶりだね」

「……………」

微笑みは氷の視線で射貫かれ、挨拶は華麗に無視される。

ダークブラウンのジャケットに十字の銃帯、コバルトブルーの瞳と緑の黒髪。

そして微かに硝煙の匂いを漂わせた少女は、僕を見て僅かに眉をひそめ、呟いた。

「それで——貴様、人間か？」

今度は僕が無言になる番だった。

【 i X 】 生存。

「それで——貴様、人間か？」

僕に短機関銃を連射した挙げ句、牢獄にぶち込んだ可憐な少女は確かにそう言った。

いや少なくとも君よりは人間的だと思うよ——とはまさか言えるはずもなく。

何せ彼女、目が怖すぎる。

元々切れ長なのだろう目を更に細め、睨むというより観察するような視線を浴びせてくる。

令嗣よりジョークが通じそうにないな、この娘。

「それは……どういう意味かな」

底冷えがするような視線を、柔和な微笑みで受け流しながら問う。
手錠が k a s h a n と揺れた。

「言葉通りだ」

少女は苛立ちを見せる様子もなく、背筋を伸ばし直立した姿勢のまま淡々と切り返す。

廊下に備え付けられたランプの灯りが、風もないのに少しだけ揺れた。

「現場に散らばっていた大量の血液。あれは貴様のものだった」

数枚の書類を鉄格子越しに投げ入れる。

拾って読もうとするが、そこに書かれている言語は勿論というべ

きが読めなかった。

だが読めないはずの言語は脳内で自動的に変換され、意味のある情報へと化する。

言語が翻訳されるのか？

実に便利な事だが、多分後ろで糸を引く者がいるのだろう。

《那由他路》で、帽子屋は僕達をこの世界へと招いた人物は別にいると言っていた。恐らくその人物による計らいと推測できる。もしかすると帽子屋自身の気遣いかも知れないが、別にその辺りはどうでもいい。

書類には先程の少女の言葉が科学的に立証されていた。つまり現場の血液鑑定の結果と、僕の身体検査の結果の合致証明だ。

コンピュータ処理されたような電子図と写真も備え付けられている。

「衣服も大型の槍で突かれたように破損、背面まで貫通。その他の状況証拠も含め、導かれる事実はひとつだけ」

少女が一瞬言葉を句切り、薄い唇をわずかに引き結んだ。

「だが……その事実の中に貴様の生存はありえない」

『生存はありえない』。

それは言葉通り、僕の存在に対する疑念と拒絶。

僕自身、それを否定するつもりはない。何故なら僕も先程からずっと考え続けていた事だったからだ。

貫かれたはずの左胸には傷一つ残っておらず、心臓が変わらず動している。

少女はもう何も言わず、ただ僕が話し始めるのを冷然として待っていた。

……やれやれ、勘弁して欲しいね。

だけど、この少女は焦っていたのかひとつだけミスをした。ひとつ大きく息を吐いて、静かな水面のような深青の瞳に向かって呟く。

「蠍」

少女に稲妻の如き戦慄が走った。瞳は小刻みにぶれ、細い肩がびくんと跳ねる。

それらはほとんど一瞬の出来事だったが、僕はそれを見逃すほど甘くも鈍くもない。

やはりこの少女はあれを知っている。

「……何の話だ？」

少女は陰しい表情を見せた。

嫌悪感と懐疑心を顕わにし、それでかすかに残っている動揺を覆い隠そうとする。

「蠍の話さ。赤い月の夜のね」

そう言い終わるか否かの刹那、鉄格子の向こうでダークブラウンのジャケットが突然はためいた。

それが背面のホルスターから銃を引き抜く動作によるものだった事を僕が理解したのは、交差された少女の両手の黒光りする短機関銃を目の前にした時だった。

「脅し？ 無駄だよ。君は僕を殺せない」
「……………」

少女の目が鋭くなった。

努めて穏当な声と表情で、緊張の糸が切れる寸前のギリギリの状態を保つ。

「『とある街で、血生臭い殺人現場が見つかった』」

少女は沈黙してはいるが、狩人が獲物を狙うような視線を僕に向けたままだ。

僕はそれに気付かないふりをして、天井のランプをぼんやりと見つめながら言葉を紡ぐ。

「『ところが不思議な事に、現場には死体がなかった。捜査の結果、現場の血液や装飾品は、一週間前に失踪した人物・Xのものだと判明。当然周りは、Xが殺されて死体が隠されたのだと思う。しかし、ある日突然真正正銘のXが傷一つ無くひょっこり現れた』——この時点で周りの人間が疑問に思うのはどういうことだろうね？」

不可思議な紋様の羽根の蛾が、閑散とした雰囲気を楽しむように舞っている。

少しもぶれずに僕の眉間に向けられた銃口から、無言を貫く少女の意志が伝わってきていた。

あまりに頑ななそれに苦笑しつつ、僕は先程の書類を手の甲で叩いてみせる。

「『Xのものと思えないあの現場は一体どうやって作られたのか？』だよ」

「———！」

実際にXは生きているのだから、人が真っ先に疑うべきは証拠の確実性——つまり血液や装飾品は偽物ではないのか、という事だ。

仮にそれらが本物であつたとしても、普通はあらかじめ用意していたものを準備したと考えられる。Xの協力があれば一層その方法は現実的になるだろう。

「ところがある人物・Yは、血の滴る現場は本物で、Xはその被害者だと考えた。ピンピンしてるXを前にしてね。そんな異端者Yの人物像は？」

そこで初めて僕は少女に顔を向けた。

冷え切ったまま何の感情も浮かんでいない表情の彼女に、微笑んでチェックメイトをかける。

「その状況下からの生存がありえるかもしれないと思っている人物。
……Yさん、ここは情報交換と洒落込もうか」

【X】 警報。

「ふー……」

コーヒーの入ったマグカップを包みこむように持つと、ふいに気の抜けた声が漏れた。

牢の中で凍えきった身体はコーヒーとコートで大分暖まってきた。コートは看守が私物の余り物をくれたのだが、近接格闘用に改造済みだった。所々に縫い込まれた鉄板と数種類が揃った短剣のせいでひどく重い。

僕のそんな様子を見て、看守は申し訳なさそうに顎髭をなでた。

「悪いな、着にくいだろう？ エデットガット社のコートは品質は良いんだが重くてな」

「着る物があるだけで十分だよ。今まで上半身裸だったんだからね」
「む、むう……」

冗談めかして皮肉を言うと、看守は弁解も出来ないといった風にならずに声を上げる。

僕には軍隊上がりの刑務官を苛める趣味はない。話題転換を兼ねて疑問をぶつけてみる。

「ところで、さっきまで囚人だった人間にダガーなんて持たせて良いのかな？」

試しに取り出してみた短剣は、日本の忍者が使用していた苦無くなくに形状が似ていた。

見ただけでも研ぎ澄まされている事が分かる。数人程度なら殺傷させるのも容易いだろう。

拘束具を解かれて牢獄から出されたとはいえ、こんな武器を備え付けたコートを渡して構わないのか。

「ふむ……それはそうだが」

看守は値踏みするような視線で僕を眺めながら、反撃とばかりに愉快そうに唇の端をつりあげた。

「そいつで俺を殺せるのか？ 坊主」

つかの間の静寂。

熱いコーヒーに口をつける。泥のように濃いブラック。僕は苦笑した。

「まさか。殺しは苦手なんだ」

ツク……という押し殺した笑いが、うつむいた看守の喉の奥から響く。

そしてそれは徐々に大きくなって、

「……っだ——っはっはっは——!!」

爆笑になった。

「そうか！ 殺しは苦手か！」

僕は何が何だか分からずに、それこそ鳩が豆鉄砲を喰らったような顔をしていたのだろう。それを見て更に看守は笑う。実に可笑しそうな明朗な笑いだったので、別に不快ではなかったのが救いだっ

た。

「……まあ俺を殺したところで、一生ここから出られなくなるのがオチだろうよ。外部に通じる扉は指紋・声紋・虹彩の生体認証装置で電子制御してあるからな」

彼は一通り笑い終わると、頬を緩ませたまま、親指で自分の首を掻き切る仕草をして見せた。

「そうなんだ。えらく頑丈なんだね」

「まあ……ここにはちよいと訳ありの奴がいてな。内側からも外側からも、簡単には出入りできない仕組みになってる」

……外側からも？

何となく気になったが、一息ついたところで取り敢えず今の状況を確認しよう。

先程、僕はあの黴っぽい牢獄から釈放された。……否、釈放というのには語弊があるかもしれない。監禁から軟禁といったところだ。今は牢獄から少し離れた看守室でくつろいでいる。監視カメラの映像を映し出すモニターに囲まれていたものの、十分なくらいにスペースはあった。

短機関銃の少女は、牢獄から出るときにはいつの間にか姿を消していた。

……いや、ホッとしてるだとかそんな事は全然思っていないよ？

「そういえばここに来るまでの間、他の監獄は全部空だったけど……」

看守は勢いよくコーヒーを飲み干して、大儀そうに頷いた。

「ああ。この監獄に収監者は三人しかいねえからな。坊主を含めれば四人だが」

「三人!？」

確かに廃れた感じはするが、囚人が三人とは役不足に過ぎる。この看守室に来る道中に見た牢獄だけでもざっと四十はあったし、風変わりな男とはいえ看守も雇っている。僕は狼狽を隠せなかった。

「ここはもともと《政府》直属の自治体収監施設でな。今は使われてないんで、ちよいとばかり俺達が拝借してる」

にっと悪戯っぽい笑みを浮かべて、秘密だけどなと付け加える。

「えーつと……『俺達』って?」

笑みから一転。ぽかん、という効果音を付けてもいいくらいに気持ちよく監守の口が開いた。

「それじゃあ何か、坊主? お前さん俺達が誰か分からずにのんびりコーヒー飲んでるのか?」
「うん」

ほとほと呆れたといった様子で監守が溜め息を吐く。

そして何か言おうと僕にぐつと詰め寄ってきたその時——突然、部屋中の監視モニターが真っ赤に光り出した。

備え付けられた警報機が甲高いサイレンを発し、監守の表情が陰しくなる。

『緊急事態発生：収監番号一八九九七』

「一八九九七……ロヴェードの檻か!？」

彼はモニターに表示された警告文を睨むと強い口調で吼え、跳ね上がるように立ち上がった。

その拍子にマグカップが落ちて割れたが、それも気に止めていない様子だ。

監守室から出て行こうとした時、思い出したように僕の方を見て言った。

「お前さんはここにいてくれ。危険だから絶対に外に出るんじゃないぞ」

「うん。了解」

そして扉の方に身体の向きを戻して、またすぐにこちらを向いた。

「ああ、それと」

「……………」

「もし死んだら——すまん」

ぐつと親指を立てシニカルに笑うと、看守は全速力で走り去った。

「『死んだらすまん』?」

はて………どうということだろう?

僕は首を傾げながら、すっかり冷めてしまったコーヒーに口を付け………思い出した。

『——まあ俺を殺したところで、一生ここから出られなくなるのがオチだろうよ——』

い。
少し寒気がしたのは、
コーヒーが冷めすぎている所為かも知れな

【Xi】 書斎

——書斎。

それだけでその部屋を形容する事は到底出来ない。壁という壁に備えつけられた本棚には大量の専門書が詰め込まれ、それでも収まりきらない本が床中に積まれている。

足の踏み場もない部屋の中央に、一人の少女が椅子に座って本を読んでいた。

年齢は十三、四ほど。小柄ながら、すっと伸びた背には彼女の実直さが表れている。

真っ直ぐに下ろされた髪は『空』のような銀色。身に纏う白いワンピースが良く似合っていた。

そう、彼女はごく普通の少女だった——両目に大量の包帯が巻かれている事を除けば。

包帯は一見すると真っ白だが、その内側には能力拡散型の演算子が緻密に記されている。

人間が生まれ持った能力が強すぎる場合——勿論それは極めて稀な場合だが——一時的に能力の拡散・封印・除去処理のいずれかをしなければならぬ。有り余った能力に自我が耐えきれず、発狂したり廃人になったりする危険性が考えられるためだ。彼女はその強大すぎる能力を眼に受けた人物だった。

「クライ」

突然名を呼ばれ、本を読んでいた少女の肩が怯えたようにびくと揺れた。

不安げな表情を浮かべた顔を上げ、辺りを見渡す。

しかし、何処に声の主が居るのかは分かっていないようだった。

「私だよ、クライ。ユウイルだ」

少女の顔がぱつと明るくなった。先程までの様子とは一転し、蝶々を見つけた幼子のような晴れやかな顔だった。

しおりを挟む事も忘れて本を閉じ、胸の前で手を重ね合わせる。

「フルーシャさん！ 来て下さったんですか!？」

書斎の扉にもたれ掛かっているダークコートの少女・ユウイルは、わずかに微笑みを浮かべた。

彼女が笑顔を見せるのは今となってはクライの前だけだ。クライの視界が包帯によって暗闇に包まれていなければそれも違っていたのかも知れないが、クライはユウイルが微笑んでいる事を分かっていたし、ユウイルもそれを隠そうとはしていなかった。

「少し話がしたい。今、構わないか？」

「はい、もちろんです」

クライは立ち上がって、おたおたと本を元の場所に戻そうとする。ユウイルは慌ててそれを制した。

「座ったままでいい。すぐに済ませるから」

「そう……ですか」

クライは一瞬だけ残念そうな表情を見せる。

しかしユウイルは手元の書類に目を落としていて気付いていないようだった。

「早速だが『聖戦黙示録』に黒い蠍の記述はあるか？」

「えっと……はい。第七十六章に該当項目があります」
「それを頼む」

ずっと息を吸い込んだ後に発せられたクライの声色は、今までの少女のものとは打って変わってひどく無機的なものだった。静かに両手を膝の上の本に乗せたまま、『聖戦黙示録：第七十六章』の暗唱を始めた。

広原の地に赤き月影の舞い散る晩、黒き鋼を纏いて、其の化身現る。

黄昏の逡巡に旅人戸惑いし時、終りを率き連れ、始りを眠らす。

貫かれし心は再び蘇る事あらじ、されど赤き力は旅人を永遠なる輪廻に誘う。

それより三度の晩の後、旅人の犠牲、月に召されん。

暗融月の化、黒き蠍の戦慄は琥珀に謳う。

ユウイルは静かに目を閉じてそれを聞いていた。

——『蠍の話さ。赤い月の夜のね』。

黒い瞳の青年の言葉が頭の中で延々と繰り返される。

（やはり、あの男もこの七六章を知っているのか？）

ユウイルは口許を手で覆っていた。考え事をするときの彼女の癖だった。

（いや、『聖戦黙示録』の五〇章以降の記述は一般向けには公開されていないはずだ。知り得るとしたらその道の専門家か、ある程度大きな組織の上層部の人間……）

「——シャ——ん？」

（《政府》、《MAD機関》……身内の可能性も否定できない。グルーデイスに連絡をいれて探らせてみる必要があるな。ならば……監獄から出したのは早計だったか？ 軍隊出身で高階級まで登り詰めていたとしたら——）

「フルーシャさん!？」

「……あ……」

「フルーシャさん、居なくなっちゃったんですか……？」

見れば、クライが悲しそうな面持ちで立ち上がっていた。

厚く古びた本を大切そうに抱きしめ、危うい足取りでふらふらと歩き出している。

形の整った顔に巻かれた包帯が少し緩みかけていた。

「クライ、私はここに居る。すまない、少し考え事をしていた」

クライは安堵の笑みを浮かべた。すとん、と椅子に腰を降ろす。

「いえ、いいんです。わたしの方こそ……取り乱してしまっ

ユウイルは本が積まれていない部分を渡ってクライの傍に近づき、そっと包帯を結び直した。

「何か不便な事はないか？ 出来る限りの事をしよう」

「そんな…… 不便な事なんてありませんよ？ 本も沢山ありますし、看守さんも面白いですし」

「……そうか」

クライは少し俯き、本の表紙を愛おしそうに撫でた。

それは何か言いにくい事を我慢しているようだったが、ユウイルの意識は再びあの青年に移りつつあり、彼女の様子の真意に気付く事が出来なかった。

やがてクライが意を決したように顔を上げたと同時に、甲高い警報機が叫び始めた。

その警報が『収監番号：一八九九七』の異常事態を報せるものである事をユウイルが知るのは、それから数分後の事になる。

「X i i」 犬齒

監守室にグルーデイスの姿はなかった。

真っ赤に点滅する監視用モニターを眺めながら、のんびりとコーヒーを飲んでいる青年がひとり座っているだけだ。

「何をした……？ グルーデイスはどこにいる……」

ユウイルは怒り心頭に発すると、かえって冷静になる性質だった。狂乱と混沌の渦である戦場を生き抜くためのスキルとして、熟練の戦士になるほど顕著にこの性質が表れる。彼女は先天的に生まれ持った部分も多かった。

「ああ、この監獄の中に居たんだね。てっきり外へ出て行ったのかと思ってたよ」

青年はユウイルに背を向けたまま呑気な声を出した。全くの無防備で隙だらけだったが、ユウイルはホルスターに収まった銃をいつでも引き抜けるように体勢を整えている。

「質問に答える。警報は貴様の仕業なのか」

「だとしたら……殺し合いになるのかな」

青年は肩越しにユウイルを見た。

明確な意識というものが存在せず、ただ漠然と状況を眺めるだけの瞳。

刹那、ユウイルはそれに飲み込まれていくような感覚を覚えた。ふらつきそうになるのを強く踏みとどまる。k y u、と足元の床が不快な音をたてた。

「……冗談だよ。僕は何もしていない」

彼は苛立っている風でも、面白がっている風でもなかった。勿論冷静さを欠いてもいない。

もしこの男の中に、本当に『聖戦の化身』が宿しているとしたら――？

ユウイルの脳裏に一瞬だけそんな考えがよぎる。
精神の静寂と思考の安定の、微かな揺れ。

青年はそれを読み取ったかのようにわずかに微笑んだ。その瞳に、先程の不気味な空虚さはない。

「あの看守ならたぶん一八九九七号室にいると思うよ」

青年は再び正面を向き、ひとつのモニターを指さした。
モニターには監視カメラの映像は映っておらず、不快な雑音とともに砂嵐が表示されている。

明らかに異常事態を示しているそれは確かに一八九九七号室のものであった。

青年は何か思い出すように宙に視線を彷徨わせる。

「確か『ロヴェード』の檻がどうか言っていたけど……」
「……………」

ユウイルは闇色のジャケットを翻し、無言のまま踵を返した。
戦闘用の革靴がタイルに打ちつけられる音を響かせながら、扉に向かって歩き始める。

扉を開け監守室の外の廊下に出るときに、彼女は青年の背中を射

るように見据えながら言った。

「貴様はここを出るな」

「勿論、言われなくてもそうするつもりだよ」

金属質の扉が閉まる音を背に受けて、部屋にひとり残された青年はぐっと伸びをした。

「……やっぱり静かな方がいいね。一眠りしようかな」

青年のふわりとした欠伸を打ち消すかのように、廊下から銃声が響いた。

時は遡り——暗融月が浮かんでいた夜。

とある古い牢獄に、美しく若い女がひとり、磔にされていた。

窓から差し込む月明かりを受けて艶めかしく光る金色の髪。

装飾きらびやかな漆黒のイブニング・ドレス。

夜の森を思わせる冷酷さと、血液を凝縮したような紅が同居する瞳。

木杭が打ち込まれた両手首と右胸から、留まる事を知らずに溢れ続ける血。

「……八百年」

一筋の血が走っている唇が震え、透き通るような声が零れる。

「……八百年、待っていました。この……かはッ……」

言い掛けて、苦しげに咳き込む。血飛沫が牢獄の床に散った。

「暗融月の夜、に……」

別の生き物のような真っ赤な舌が口許の血を舐め取る。

その口角はいつしかすつと吊り上がり、鋭い犬歯が露わになっていた。

「我が一族の主……『黒蠍』が蘇る事を……」

赤き月は静かに夜空を動く。

牢獄の窓から月が見えなくなった時、彼女も動かなくなっていた。

『廊下から銃声が聞こえる』なんて事態が起こった時にどうすれば良いか、僕は知らなかった。

ただ少なくとも今のところは、それは僕に向けて発せられたものではない。

「……じゃあ大丈夫かな」

モニタリング用の椅子に寄りかかって目を閉じる。

身体的にも精神的にも疲れ切っていた僕は、徐々に眠りに落ちて

「——いけるはずもない、か」

溜め息。その溜め息も銃声に飲み込まれる。

銃声は恐らく少女の短機関銃のものだった。

性能は非常に良いようだが、周りの人間が快適に過ごせるような配慮は成されていない。
サイレンサー

尤も、機関銃に消音器という話は殆ど聞かないけれど。

「……………」

監守室の扉が蹴り開けられ、両手に銃を提げた物騒な少女が入ってきた。

その表情は普段通りクールなままだが、僕を親の敵のごとく睨み付けている。

「おかえり。随分と早い帰りだけど……何かあったのかな？」

少女はそれには答えず、振り返って横に備わった電子制御板を操作した。

扉がロックされる機械音が二、三度響く。それによって扉は大幅に厳重にロックされたようだった。

「…………ヴェンバイアの封印が解けた」

少女が消え入るような声で、だが淡々と言った。

それは独り言のようだったが、次は僕に正対する。

「貴様、本当に『黒蠍』を——」

彼女がそれを言い終わる前に、制御されていた金属の扉がG u s
h a r iと潰れた。

【X i i i】 口紅。

「お初にお目にかかりますわ、閣下」

まるでアルミ箔で出来ていたかのようにひしゃげた金属扉。

その向こうから聞こえてきた声はしとやかな女性らしい響きと並々ならぬ気高さがあった。

扉の奥をじっと見つめてみるが、粉塵が舞っていてその姿は確認できない。

少女は素早く後方へ数メートルを跳躍して僕の隣に移動すると、身をかめ慣れた手つきで弾倉を入れ替えた。表情に焦燥の色はない。扉が破られる事は想定していたようだった。

「わたくし、ローリエ・ヴェ——」

新しい弾丸を装填した短機関銃を携えた少女がすと立ち上がる。鈍く黒光りする機関銃を声の主に向け、一欠片の躊躇いもなく引き金を引いた。

「……………うわぁ」

薬莢が飛散し空気が爆ぜる。独特な連射音は一つの楽器の音のようだ。硝煙が一気に室内に充満する。

驚きを禁じ得ない僕の隣で、銃を撃ち続ける少女は眉一つ動かしていない。

「……………」

しばらくしてふいに少女が攻撃の手を止めた。わずかに目を細め、

両の手に握った銃の先を睨む。

「ふふつ、いいですね」

もはや扉が破壊された時のものか火薬によるものか区別が付かない、視界を覆う土煙。

その奥からひとりの女性が優雅な足取りで現れた。

「とてもいい。ぞくぞくしますわ、わたくし」

中世ヨーロッパで栄耀栄華を極めていた上流貴族が、何かの手違いで異世界にやってきた。

そんなお粗末な比喻を使っても良いのなら、目の前の女性はまさしくそれそのものだ。

様々な装飾がなされた豪勢極まりないドレスは夜の闇。対照的に煌めくのは、木漏れ日の雫を思わせる柔らかな膨らみのある金髪。しなやかで丰满な肢体がミステリアスな雰囲気を一層と強め、艶やかで肉感的な唇には真っ赤な口紅ルージュが引かれている。

美の資質を詰め合わせたような完璧な美しさ。

だが残念なことに、その容姿に陶醉して然るべき健全たる男子高校生（僕）は混乱しすぎていた。

勿論、あの銃弾の嵐を浴びてなお、こうして微笑を浮かべながら立っていることに対してだ。

ドレスにさえ傷ひとつ付いていないのは、奇妙だとか異常だとかを通り越して哲学的な境地にすら達せそうである。それについて考える事は……取り敢えず放棄。この現状は、僕と僕の世界の常識を

逸脱した先の上空で振り返り、そこから僕達を完膚無きまでに叩き潰そうとしていた。

しかし僕の戸惑いの原因はそれだけではない。
彼女を見ていると、まるで人間と酷似した何かを眺めているかのような感覚に陥ったのだ。それは僕の中で不明瞭などろどろとした渦を巻いていた。

「自己紹介が遅れました——いえ、違いますね。中断させられました、銃撃で」

死人のように白い手で口許を隠してくすくすと笑う。何が面白いのか意味不明だ。

「ローリエ・ヴェン・ドルチェリア。以後お見知りおきを」

そう言っただけで彼女は含み笑いを浮かべたままゆるりと会釈をした。僕はやっとなぎさな微笑みを返して、ついでにひとつ気になっていた事を尋ねる。

「えっと……あの扉は？」

「あ、壊れてしまいましたわ」

ローリエは両手を頬に当てて恥じらう仕草をして見せながら言った。

口の端が少しばかり引きつる。あくまで『壊れた』と主張するつもりらしい。どんな自然現象だ。

「……廃れきった一族の末裔が、今更何の真似だ？」

しばらくの間無言を貫いていた少女がぼつりと呟いた。

銃口と視線はローリエに向けられ、一寸の揺らぎさえ見られない。柔和だったローリエの目がずっと細くなった。眼光が鋭さを帯びる。

「……いま何とおっしゃいましたか？ よく聞こえなかったのですが」

「もう貴様らは大昔のくだらない偶像崇拜の遺物でしかない。さっさと獄に戻れ」

吐き捨てるような少女の言葉。

流れる金髪の奥、瞳の深紅に明らかな激情の色が冷たく広がった。

「よく聞こえました。もう結構ですので死んでください」

その瞳とは対照的に凍えきった声色。表情はペンキで塗り固められたようにのっぺりとしていた。

ふわりとした彼女の髪が風を受けて浮き上がったように見えたのは一瞬。漆黒のドレスが宙を舞い、もはや明確な殺意の塊と化した瞳が血飛沫を思わせる軌跡を描く。跳躍に距離が一気に縮まり、僕はほとんど何も出来ないまま啞然としてその光景を眺めていた。

——少し我慢しろ。

少女が僕にやっと聞こえるくらいの声量で囁く。すなわちそれは僕に言った台詞なのだろうが、全くもって理解不能だった。この状況で僕が我慢する事といえは死に際の悲鳴くらいだ。

だがクエスチョンマークを浮かべて少女の方を向いた僕がその言葉の真意を問う必要はなかった。

彼女がローリエに向けていた機銃を僕のこめかみに突きつけてい

る。

「……………えあ……………」

僕の口から再現不可能な奇声が漏れた。

呆気にとられた僕を顎でくつと指し、少女は冷たく抑揚のない声で告げた。

「止まれ。それ以上進めばこの男を殺す」

【X i V】 咆哮。

鉄製の扉を容易く潰した細腕が空を裂きながら目前まで伸びて、突然止まった。

ふう、と彼女の真つ赤な唇から失望の溜息が漏れる。乙女の血で彩られたかのような紅。

「……だめですわ。だめだめです」

先程までの鬼の如き形相とは打って変わった淑やかな微笑みが浮かんでいる。

「その方はそんなオモチャみたいな弾じゃ殺せません。……といいますか、どうやっても殺せません」

『その方』と言う時に、ローリエは僕の方へ丁寧に手を向けてみせた。

呆氣に取られている僕をちらと見ては楽しげにくすくすと忍び笑う。

「あ、ちなみに今のは演技ですわ、演技。わたくしがあの程度の侮辱で怒るはありますがせんもの」

につこりと笑って少し首を傾げる。世の男を全て虜に出来そうなシヨットだ。勿論、自分の命が風前の灯火でなければ、の話だけど。僕には絶対に本気で激昂していたという確信が持てるが、下手な事は言わない方が吉だろう。

「ところでそちらの貴女……どこまで知っているのです？」

ローリエの目の奥に一瞬だけ獣のような獰猛な光が見えた。
少女は僕のこめかみに銃を突きつけたまま澄ました顔をしている。
うっかり引き金を引いちゃったりしないだろうか。僕、普通に死ぬ
けど。

「どこまで、とはどういう意味だ？」

「言葉通りです。察するに、『暗融月』^{マヌアス}、『黒蠍』あたりまでは知
っているのでしょうか？」

「ちょ、ちよつと待ってよ。暗融月とか黒蠍とか、一体何の話なの
かな」

思わず口を挟んでしまう。ローリエが少しだけ目を見開いた。

「まあ。閣下はまだご存じなかったのですか……。どおりで波動が
微弱すぎると思っていましたわ」

「えーっと。まさかとは思うけど、閣下って……僕？」

「勿論そうですわ。わたくしの一族は代々閣下にお仕え申し上げて
おりますの」

ローリエは大仰に首肯する。

代々……？ つい昨日、訳も解らないままにこの世界に飛ばされ
てきたばかりである僕はまだロクな人間と会ってすらいらないという
のに、という事だろう。人違いではないだろうか？

「死者と不死者の境界の王、吸血鬼の核にして最後の一族……か」

少女が抑揚のないトーンで冷たく言い放つ。ローリエはもの柔ら
かな面持ちで頷いた。

「その通りです。我々は元来、生と死の境界の更に向こう側……つまり死と不死の境界を統べる者であり、完全に死に浸っている者。象徴である暗融月に仕えるは当然といえば当然ですわ」

「はっ……その主が復活したから迎えに来た、と」

「ええ。まあ、あの黴っぽい牢獄にはほとんざりしていたところでもありますし」

「……陽が当たった方が好みだったか？」

「あら、分かっているそれを訊きますの？ 見た目通りの加虐主義者ですね」

「八世紀前に『司の一族』全員を虐殺してオーラルセア宮殿を血に染めた貴様に言われたくはない」

「ふふ、昔の事ですね。それにあれば虐殺でなく報復です」

どちらも冷静に会話しているように見えるが、その実いつ爆発してもおかしくないような張り詰めた雰囲気包まれている。表面下で腹の探り合いをする二人についていけず、僕は黙っているしかなかった。

「……埒が明きませんわね。初めの質問に答えられないようでしたら、もう貴女は不要ですよ」

ローリエは残念そうに首を横に振った。

茶番は終わりだともいうように、『動』の体勢に入ろうとする彼女を、少女が鋭い語気で制する。

「待て。おそらく貴様がいま本気を出せば私には止められまい。それこそ引き金を引く前に八つ裂きにされるだろう」

「命乞いなんです……？ 見苦しいですね、醜態をさらす前にわたくしが——」

その時、少女がずっとローリエの赤い瞳から目を逸らした。そして次に視線が向かった先は――無残に押し破られた扉の残骸が残る、監守室の出入り口付近。

衝撃によって粉塵がまだ立ちのぼるその奥に、荒れ狂う灰色熊のシルエットが浮かび上がっている。

そして稲妻が駆け抜けたかのような錯覚に陥る程に激しい咆哮が響き渡った。

「――ッ!？」

狼狽の色を隠せないローリエが振り返る。

だが時すでに遅し。次の瞬間には、額から血を滴らせながら悪鬼羅刹の如く疾駆した雷神が、身の丈を優に超える大斧で彼女を切り裂いていた。

左の首筋から急角度で侵入し、一直線に右脇腹へと抜ける。間違いなく即死の経路を辿ったはずのハルバードの刃は銀色の輝きを保ったままだった。

ローリエの身体から血の代わりに噴き出たのは、大量のくすんだ灰。

非常に細かいそれは勢いよく飛散した後、重力に逆らって砂漠の風のように彼女の周りを包み込んだ。

「…………ふふっ」

何となく予想はしていた。

それでもやはり驚きを禁じ得ない。いや、むしろ信じたくないという感情に近いが。

「……ふふふつ、いい。とつてもいいですわ、貴方。あれで死んでいなかったとはまさに不死身です。しかし残念ですが今度こそ——」

傷一つ、塵一つついていないローリエ・ヴェン・ドルチェリア。

彼女はどこか楽しげな、そして凍てついた微笑みを浮かべてそこに立っていた。

「——死んでもらいますね」

「XV」 太刀。

「生憎だな、ロヴェード。俺はそう簡単に呉れてやる命は持つてねえ。……お前さんと違つてな」

僕達を窮地から救つた大男はそう言つてニヒルに笑つた。

左顔面は血に染まつているが、熊のような巨軀に橙色の野性味溢れる顎髭、そして磨き込まれたハルバード。この監獄のたつた一人の看守・グルーデイスに間違いなかった。

「真つ二つにして一泡吹かせてやろうと思つたが、傷一つなし——噂に聞いた以上の化け物だな」

震える両腕で大斧を構える。床のタイルには決して少ないとは言えない血痕。その体軀と武器の重量を支えるべき足元はよろよろとおぼつかない。身体のダメージはかなり深刻であることが見て取れた。

僕達に背中を向け看守と正対するローリエは、不気味なほど穏やかに佇んでいる。

まるで獲物を狩る前にじっくりと品定めをする虎のようだった。

「グルーデイス、もう十分だ。退がれ」

「それは飲めませんぜ」

僕の隣で少女が身を乗り出す気配がした。口ぶりこそ淡々としているが、確かにそこには焦りが含まれている。彼女にもグルーデイスとローリエの戦いの結果は見えているようだった。だがこの一触即発の状況で下手に援護射撃をすれば、看守の移動範囲は更に狭まり、行動のタイミングも取りづらくことになるだろうことは自明だ

った。

看守がそんな葛藤の中で齒ぎしりする少女に優しげな眼差しを向ける。

「ボス…… あんたとあんたの親父さんには世話になった。野良犬同然だった俺を拾ってくれて、感謝してもしきれない。最期の仕事はその恩返しにさせてくれねえか」

「……………」

少女は何も言わない。

看守は満足だと言わんばかりに微笑み、微かに頷く。

「……ボスには指一本触れさせん！」

看守の身体に一層力が入る。筋肉が強張り、軍服の上からでも身体全体が一回り隆起したのが分かった。

ローリエはそんな彼を見て微かに首を傾げる。

「解せませんわ。ほとんど瀕死の状態でヴェンバイアに戦いを挑む事もそうですが、何よりその小娘は貴方が命を懸けるに値する人間なのですか？」

「ふん、永遠に理解できまい。命は喰らうモノだと思えんお前さんにはな」

ローリエの瞳がずっと細くなり、内側から冷たい殺意が広がり始めた。

「そうですか。ではもう話す事ありませんわね」

次の刹那、突き出された吸血鬼の細い腕が看守の左脇腹を貫いて

いた。

鮮血が舞い、看守の口から新たに一筋の血が流れる。ローリエの金髪が反動でふわりと揺れた。

「死んで下さい」

「グルーデイスッ!!」

少女が激昂する。怒りにまかせ機関銃を構えるが、その先でローリエは看守を楯に微笑していた。

「大人しく閣下をこちらに渡して下さい。素直に言う事を聞いて頂ければ――」

「やっど……捕まえたぜえッ、吸血鬼……!!」

その時、グルーデイスの目に異様なまでの生気が燃え上がった。振り向きざまに渾身の力を込めて大斧を吸血鬼に叩きつける。

突然の反撃に意表を突かれたローリエは対応できない。ハルバードの刃は彼女の身体を両断し、床のタイルを轟音をたてて砕いた。

「……貴方には本当に驚かされますわね。ですがわたくしにはその最期の一太刀さえ無意味なのです」

血液の代わりに大量に吹き出した塵灰の中で、ローリエが嘲るような、それでいてどこか失望したような笑みを浮かべた。既にその傷口は再生を始めている。

看守は武器を床に突き刺したまま、ぼたぼたと傷口から血を垂らしてゆらゆらと数メートルを後退し、懷から何かの小瓶を取り出した。

「……甘い」

ハルバードに向かって気怠そうに小瓶を投げつける。
硝子が碎ける音とともに薄い黄色の液体が飛散し、独特な匂いが
辺りに充満した。

「これは――ウイスキー？」

それは黴っぽい湿り気と混じり合って監獄に重く淀んでいたウイ
スキーの匂い。

看守は血が溢れ続ける口許を乱暴に拭い、軍服の内から小型のピ
ストルを引き抜いた。銃口の向く先は大斧の輝く刃。

「――ッ！」

完全に復活したローリエがその意図を把握する。慌てて後ろに逃
れようとしたが、ハルバードの刃が食い込んだ漆黒のドレスがそれ
を阻んだ。ドレスを引き千切ろうと白い手が伸びる。

「こいつが……最期の一太刀、だ」

乾いた銃声が響いた。

銀の刃が甲高い悲鳴をあげて銃弾をはじく。白い火花が見えたと思
ったのも一瞬、即座にハルバードは業火に包まれて燃え上がった。
熱気を帯びた風を浴びて汗が噴き出る。

炎の中に浮かび上がる黒影は狂ったようにもがき苦しんでいた。

直視できずに目を逸らす。

「グルーデイス！」

少女が駆け寄ると同時に、看守が倒れ込むように膝をついた。
荒く細切れの呼吸。瞳は虚ろで視線は空を彷徨い、咳き込むと震える唇から血が零れた。

「……せ……」

「喋るな！ 待っている、今止血を——」

ジャケットから応急処置の道具を取り出した少女の手を、看守が強く掴んで止める。

床の血溜まりは際限なく広がり続け、炎の元で紅く輝いていた。
看守が何かを伝えようと苦しげに喘ぎながら口を開く。

「……聖霊具……を、取り戻せ……」

【XV i】 最期。

「聖霊具……だと？」

聖霊具——その言葉を聞いてユウイルは心臓の動悸が一層激しくなるのを感じた。

グルーデイスが微かに頷く。先程までの荒いそれとは一転して、今は不気味なほどに穏やかな呼吸をしている。

「もう……俺に時間は……。全ては——」

その後も何かを語ろうとしたが、意味のある音にはならない。ただ力なく唇が動く。

やがてそれも吸血鬼を包む獄炎に溶けるように消え、グルーデイスは静かに目を閉じた。

「グルーデイス。私は、必ず」

傍らでユウイルが呟く。それが彼に届いたのかどうかは分からない。

黒髪の青年は少し離れたところで看守の最期の声なき言葉を反芻していた。

『クライ』。

確かにそう言っていた。だがそれにどういった意味があるのか、彼には知るよしもない。

「……行くぞ」

ユウイルが立ち上がった。そのコバルト・ブルーの瞳に揺らぎはない。

青年は燃えさかるハルバードに視線を移す。しかしそこにロヴェードの姿はもうなく、黒ずんだ灰が溜まっていた。

「人体が燃え尽きるには早すぎるね」

「ヴェンバイアは外部からの圧力によるものとは別に自己の意志でも粉塵化できる。一種の防衛手段だ」

ユウイルは淡々と言い放ち、ジャケットの襟を正しながら監守室の出口に向かった。

看守に黙祷を捧げていた青年が少し遅れてその後を追う。

「これからどこに？」

「この監獄は破棄し、連盟の東方支部へ向かう」

扉の残骸を飛び越えて先に廊下に出たユウイル。青年は立ち止まって彼女を見つめた。

「……どうした。ここが火の海になる前にやらなければならない事はまだある」

「僕はこの建物の構造が良く分からない。足手まといになるのは御免だしここで待機しておくから、その用事を済ませてきてよ。ちょっと気分も悪いからね」

ユウイルは僅かに振り返って肩越しに青年を一瞥した。

廊下は照明が切れて薄暗く、彼女の表情はよく読み取れない。

「気を遣っているのか。私に」

青年はおどけたように肩を竦めて苦笑した。

「何の話？　むしろ僕が君に気遣って欲しいと頼んでいるんだけど」
「……そうか。なら私は先に行く」

ダークジャケットをなびかせて走り去るユウイルが視界から消える瞬間、青年には彼女の瞳が炎の光を熱く照り返したように見えた。

聖獣の力を制御し、駆使し、増幅させる古代文明の神器——《聖靈具》。

その姿はひとつに定まっているわけではない。聖戦黙示録だけ取って見ても、鎧や兜、剣といった形で表れる事もあれば、宝玉や鏡を象っている事もある。

ところが、それだけ多くの記述があるにも関わらず、ひとつも実物が残っていないのだ。聖獣の存在とともに聖靈具も伝説上のものと考えられているのも無理はなかった。

『……聖靈具……を、取り戻せ……』

牢獄の崩壊から二日。目的地のある西に向かって進んでいるユウイル達は、サトロ郊外の大木の木陰で休息をとっていた。

だがその間にもグルーデイスが遺したその最期の言葉は片時もユウイルの頭を離れる事はなかった。

（はたして、聖靈具というものが本当に存在するのか？）

「——という訳で」

不意に聞こえた少女の声で、ふと現実に取り戻される。
ユウイルは隣で話し込んでいる二人の若者に目を向けた。

「英雄クラリオンを乗せたまま白銀の龍ヴァクスが空に溶けて、この空は銀色をしているのです」

ひとりは一瞬懸命に聖戦黙示録のあらすじを語る少女・クライ。
あまりに生まれ持った力が強大すぎる為に《連盟》によって監獄の一室に幽閉され、禍々しい程大量の包帯で視界も奪われている。
グルーデイスは今際の際に彼女の名前を言おうとしていた。

『もう……俺に時間は……。全ては——クライ』。

（文脈から推して、グルーデイスはあらかじめクライに全ての事を話していた……という事か？）

そう考えて監獄から脱出する時になんとか連れ出せはしたものの、未だユウイルはグルーデイスの死と聖霊具についての話を切り出せていなかった。

「なるほど……。ところでそのヴァクスというのは——」

そしてもうひとりが、神妙な顔をして熱心にその話に耳を傾ける黒髪の青年。

彼についての事件はあまりにも謎が多すぎるが、その内面もヴェールに包まれている。

まず感情を表に出す事はない。超越した能力を持つ吸血鬼であるロヴェードに殺されかけた時や、グルーデイスの死を目の当たりにした時も殆ど感情の揺れはなかったように見えた。

のらりくらりと様々な事から身をかわし、微笑が張り付いた仮面をつけたまま傍観する——そういう種類の人間だとユウイルは認識していた。

（——のだが……）

「——それで聖戦黙示録では、ヴァクスには『永遠』という意味もあるんですよ」

「そうなんだ。実は僕の名前も——」

（やけにクライが懐いているな……）

クライは目が見えない代わりに他の感覚が非常に機敏であり、それは五感に限らず他人がどんな人間かを見極める——いわば心眼も鋭いものを持っていた。

（全く以て掴めない男だ）

ユウイルは軽く溜め息を吐くと、木漏れ日の下で銃の手入れを始めた。

「Xvii」 名前。

根本から仰ぎ見れば、世界の全てを覆い尽くしているようにも見える巨大な広葉樹。

成人した男達でも囲もうとすれば五、六人は必要そうな太い幹とは対照的に、一枚一枚の葉は子供の手くらいの大きさで細かく葉脈が走っている。

草原を駆け抜けてきた微風は頬を優しく撫で、溜まった身体の疲れを掠め取っていくようだ。

「おい、貴様」

背中から声が掛かる。……この無味乾燥な口調から想像される人物は二人。

一人目は僕の友人、鴉名令嗣。

江戸時代、徳川に仕えた暗殺専門の忍『暁鴉』の末裔にして、名家・鴉名の若き当主でもある。

《那由他路》から更に時空を超え、僕とともにこちら側に飛ばされてきたとみて間違いないのだけれど、未だ再会を果たせていない。頭脳明晰で戦闘能力も抜群、何かと危険なこの銀世界で最も頼りになる、僕が今一番会いたい人ナンバー・ワンだ。

二人目は短機関銃少女。

危険度リミッター振り切り。

さて、この声の主はどちらだろうか？

「……聞こえていないのか？」

僕は木漏れ日に目を細めながら考える。

こういう場合は前向きに考えなければならない。ただでさえこの

訳の分からない状況なのだから。

別にあの少女がどうだというわけではない。ただほんの少し、僕は僅かな可能性に懸けたいだけ――。

僕は口許に微笑を浮かべて振り返った。

「やあ令嗣。久し振りだね、元気だっ――」

「出発だ。準備をしろ」

「了解」

無表情のまますたすたと脇を通り抜けて行く。数万もの葉が風にそよぐ光景はなかなか迫力があるが、全く興味を示す様子がない。常識、冗句に加えて情緒も分からないらしい。

「クライ。体調はどうだ？」

近くの切り株に腰を降ろし、ぽうつと気が抜けた顔をしているクライに声をかける。

「あ、フルーシャさん。大丈夫ですよ、道中色々ヴァクス君が気を遣ってくれましたから」

「ヴァクス……？ 黙示録の白銀龍の事か？」

「はい。彼の名前は『とても長い時間』という意味だそうですから、『永遠』を表すヴァクスを当ててみたんです。ヴァクス君も気に入ってくれましたから」

「なるほど……ヴァクス、か」

ちなみにこれは、僕達を銀世界に『招待』した人間が特定できない以上、明らかに目立ってしまう本名は出さない方が無難だと考えての計らい――なのだが、少女は何とも皮肉っぽい視線を浴びせてきていた。

おおかたこの世界の神話で英雄視されているヴァクスと僕とのギヤップをあざけっているのだろっけれど、僕はそれ以前に彼女の感情が宿った目が意外だった。

クライと居るときだけは、彼女はきつと少しだけ普段より安らげているのだろっ。

「立てるか？」

「ゆっくりなら一人でも大丈夫ですよ……っ！？」

クライが盛り上がった木の根に躓いてバランスを崩したところを少女が優しく受け止める。

「気持ちは分かるが、無理なくていい。まだ旅には時間がかかるからな」

「あ……ありがとうございます。そうですね、怪我しちゃったらもつと大変ですもんね」

上手くクライをリードしながら、静かに歩き出す少女。そのコバルト・ブルーの瞳から冷たいナイフの光は消え、今までで一番優しい色を帯びていた。

「——ところで僕、君の名前まだ知らないんだけど」

「そうか」

どうしてここまで扱いに差があるのだろうか。

《 古刃連盟極東第一監獄炎上事件についての概要 》

施設において最重要収容人とされていた『ローリエ・ヴェン・ドルチェリア』の覚醒による一連の事件。発生時刻は昨夜未明と思われる。

調査が不完全である為、当資料は判明した事実のみを綴るものとする。

【？】収監されていた囚人三名のうち、牢番号《一一六四四》内で一名の死亡を確認。焼死。遺体の破損が大きかったが、調査班による科学鑑定結果から『バイシルル試作体？』であることが判明。身体構造等において利用価値があるとして調査班による解剖を進める。

【？】上記一名を除く二名『ローリエ・ヴェン・ドルチェリア』『クライ』は未発見である。既に逃亡している可能性が高いと思われる。以後諜報員による追跡を続ける。

【？】監守室内にて看守『ブルーデイス・コールハート』の大量の血液を発見。出血量から死亡していると思われるが、死体は確認できていない。

以上

更なる究明を重ね順次報告する。

報部隊

白銀龍



謀

【XViii】 地力。

「あの……いま不思議な感じがしませんでした？」

大樹の木陰で休息をとった後、歩き続けて三時間ほど経った頃だろうか。

クライが首を僅かに傾げながらそんな事を僕に言ってきた。

「不思議な感じ？　僕はとくに感じなかったけど」

先頭を黙々と歩き続けていた少女——名前は結局聞き出せていないが、クライはフルーシャと呼んでいる——がついと振り返って、僕を睨め付けた。

……あ。もしかしてこの視線はあれか。少しは察しろという事かなるほど、確かにいたいけな少女にぶつ通して三時間も歩かせるのは酷だろう。

「ちょっと休憩にしようか」

僕なりに気を遣ったつもりだったのだけど、なぜか少女の視線に鋭さが増した。

「じきに目的地に着く——が、日が傾きかけている。ぐずぐずしていると野宿するはめになるぞ」

「……え？　いや、だけど」

「わたしは平気ですよ」

「クライは強いな。それに引き替え……情けない男だ」

溜め息混じりに吐き捨てる少女。

僕が『そうかなあ気にならなかったなあはいレッツゴー』と言っていたとしたら、この少女は空氣の読めない男だ、とか何とかで嘲笑していたのではなからうか。間違いない、今の状況は致死率百パーセントだった。

「クライ、今の感覚はサトロを完全に抜けた為に生じたものだ。これから身体は徐々に軽くなってくる」

「あ……なるほど。『サトロの地力』がなくなっただんですか」

合点がいったと言わんばかりのクライの表情とは対照的に、僕の頭は一気に疑問符で埋め尽くされた。

「さとり？　ちりよく？」

思わずぼつりと呟いた言葉をクライが捉え、ええっ、と驚きと非難が入り混じった声を漏らす。

「ヴァクス君……知らないんですか」

「貴様には一般常識が著しく欠落していると見える」

いつの間にか少女も歩みを止めて、僕に冷たい視線を向けてきていた。急いでるんじゃないのか、とか初対面の人間を射殺しようとする奴に言われたくない、とかいった言葉を飲み込んで苦笑だけ浮かべる。

「わたしがお話ししましょうか？　歩きながらで良ければですが」

「うーん……でも疲れるんじゃない……」

「いえ、何か話をしていたほうが気も紛れますから。遠慮なさらず」

そう言って控えめに微笑むクライは、両目を覆う包帯のまがまが

しさも浄化してしまうような優しげな表情だった。

彼女に余計な労力を使わせてしまうのは申し訳ないけれど、こちらの世界の常識を備えておく事も重要だろう。折角だから拝聴しておこう。

「じゃあお願いしようかな」

こくん、と小動物的に頷いて、クライは一段落ち着いた声音で話し始めた。

サトロについての逸話は諸説在りますが、今日は聖戦黙示録に記載されているものを話します。

古代……この一帯には都市が築かれていました。名をアーツサトロといいます。もちろん、これは近世になってつけられた名前ですので、便宜的な名前ですね。

東西南北に経路が交差する『十文字貿易』は当時の流通の大部分を賄っていたことで有名ですが、その東の最終地点を担っていたアーツサトロがかなりの発展を遂げていたことは言うまでもありません。他に類を見ない広さも相まって人口も相当数あり、文明もかなり高度なものだったと考えられています。

ところが、その繁栄は聖戦で一夜にして全て滅んでしまったのです。

……え？ 『聖戦』の説明からですか？

ん、と。そうですね。長くなりますので、ここはかいつまんで。

世界の始まりは無の誕生であり聖である、という言葉が聖戦黙示録の冒頭部分の一節にあります。この場合の無とはゼロではなく無

限大の無です。まぶたの裏に染み込んだ闇ではなくて夜空に解き放たれた闇の無です。つまり可能性の問題ですね。分かりにくいでしょうか。すみません、ここはわたしも上手く説明出来ないんです。少し哲学めいた部分ですから。

その無に秘められていた力——それが『聖』と呼ばれます。この聖というのもとても象徴的なものなのですが、端的に世界の核と言って構わないでしょう。

聖の中から生まれ出た六体の世界の化身、彼らが『聖獣』です。ただ彼らは同一意志のもとに活動するわけではありません。一種の本能的欲望に従っているのです。

すなわち——他の聖獣を喰らって全ての『聖』を手に入れること。聖獣同士の喰らい合いによって巻き起こされる戦。それが『聖戦』なのです。

……少し長くなりました。

えーと、要約すると、アーツサトロは超越的な存在の戦争で滅んだんですね。

原因がどうあれ、古代都市が滅ぶのは珍しい事ではありません。ところがアーツサトロの跡には文明の痕跡が全く残っていないのです。ただ夏草が広がっているだけ。そして同時に、動物を一切寄せ付けないという異様な『力』が働くようになりました。それを『サトロの地力』と呼ぶのです。

……実際の所、本当の話かどうかは信憑性が薄いと思われると思います。アーツサトロが存在した事は十文字貿易の相手国から発掘された文献や貿易品が裏付けているのですが、やはり文明が滅んだ理由としてはには信じがたいことでもありますから。黙示録を単なる伝説としか考えていない近代科学の研究者達の間では隕石の衝突や異常気象などの説が有力と思われるようですね。

わたしは良いと思いますけどね。なんだか素敵じゃないですか、そういうの。

【XiX】 紅潮。

「なんだか素敵じゃないですか、そういうの」

クライはサトロについての話をそう締めくくって、楽しそうに微笑んだ。

いや、いいんだけど……なんというか、かなりファンタスティックな話が飛び出してきたな。

やっぱり神話や伝承というのはどこにでもあるものなんだろうか。いやはや、まかり間違ってもその聖戦とやらには巻き込まれたくないものだ。

「あ。ちなみにこのサトロにも『聖獣』はいるんですよ」

思い出したようにクライが付け加える。

その軽い口調につられて、僕もつい冗談めかして苦笑した。

「え？ それって結構危ないんじゃない？」

「ふふつ、大丈夫ですよ。《黒蠍》を実際に見た事があるひとはいませんから」

……………え？

「…………い、いま何て？」

「ですから、《黒蠍》ですよ。暗融月マムナスの化身にして、誇り高い吸血鬼が唯一主として認める存在。それがこのサトロに祀られる聖獣です」

脳裏に再びフラッシュバックする、満月の夜。

赤黒い月明かりに照らされて突然現れた巨大な蠍。

黒金のように鈍く輝く甲殻と猛々しく研ぎ澄まされた尾。

奇跡。あるいは必然の邂逅だったのか。

万物の流れの渦に引き込まれるようにして僕はその額に触れ、そして――

「ヴァクス君、大丈夫ですか？ 少し顔色が悪いですよ」

「あ……いや、何でもない。大丈夫」

顔を押さえてゆるゆると頭を振る。

あの大蠍がその神話に出てくる『聖獣』とやらだともいうのか？
そんな馬鹿な、ありえない突拍子もない空想的だカラストロフィ
だ。

だけど……現に僕は心臓を貫かれてまだ生きている。あれが物質
と精神の狭間とか、そういう類の……そう、『聖獣』だったとした
ら――？

……いや、よそう。あの出来事は僕の理解の範疇を明らかに超えて
いた。考えても結論は出ないだろう。

それに言ってしまうば、あの蠍が化け物だろうと神だろうと僕に
は関係無い。この銀の空の下ですつと暮らしていくつもりは到底な
いのだから。

つまり。

「……はいとこころ元の世界に戻れば万事解決、か」
「えっ？」

ひとりごちた僕の言葉の意味が分からなかったのかよく聞き取れなかったのかは定かでないが、クライは不思議そうに小首を傾げていた。長い銀の髪がさらさらと揺れる。

「目的地が見えた」

見れば十メートルほど先を歩いていた少女がこちらを向き、立てた親指で進行方向を指し示していた。

「眠りの都市——ソルフィネだ」

「……何もないじゃないか。歩き疲れて幻覚でも見え始めた？」

「それはこちらの台詞だ。貴様、瞳孔が開きっぱなしなんじゃないのか？ 試しに撃ってみるか」

「死んでる可能性を指摘されるなんて貴重な体験なはずなのに、君からは既に二回も言われているんだけど。というか死体に銃弾を撃ち込む気なんだ。『試しに』って何だよ。もう突っ込みきれないよ」

「戦場なら倒れている敵兵にも取り敢えず引き金を引くのはよくある事だ。もつとも、銃剣で一体一体刺していくほうが慣用だが」

「いや知らないよ」

あまりに無意味なやりとりに嘆息する。

だが実際の所、少女のとなりに立ってみても何も見あたらなかった。

今までと同じように広原が広がっているだけだ。確かに夏草だけでなく背の高い木や色とりどりの花が現れ始めていて、ところどころに小鳥なども見えたりはするが、目新しいものではない。

「すぐに分かる。行くぞ」

また先にすたすたと歩いて行く少女。微風を受けて艶やかな黒髪とダークジャケットをなびかせている姿は中々絵になりそうだけど、その表情は不機嫌なのかと疑ってしまうほどに冷たい。

「ふー……。じゃあ行こうか、クライ」

クライの手をとろうと振り返ると、彼女はちいさな身体を強張らせて両手で口許を押さえ、茫然自失して固まっていた。

「だ、大丈夫？ いったいどうし——」

「クライ!？」

僕の慌てた声を聞きつけて、少女が瞬時に駆け戻ってきた。僕を乱暴に押しのけてクライの肩を掴む。

「どうしたんだ？ しまった、演算子の暴走か……!？ まさか『地力』影響下から抜け出したせい——」

驚いた事に彼女はこれまでにないほど取り乱していた。古びたウエストポーチをがさがさとあさり始め、小瓶に入った怪しげな赤褐色の粉塵を取り出す。

「これで一時的に対処できるか……?」

「……………いたい……」

クライがぼつんと言った。少女と僕が目を見張り、混乱に一層拍車が掛かる。

しかし僕にはどうすることも出来ず、ただ邪魔にならないところから見つめているだけだった。

「痛みだと……？ 演算子の暴走でそんな症状は……」

仮面を付けたような少女の表情に狼狽と絶望の翳りが差した。
そのとき。

「……じ、じゅっけんで……いたい、いたい………こわいで
す……」

「……」

「……」

「……ねえ。これって……」

「………なにも言うな……」

悔しげにうつむいている少女の耳まで紅潮した横顔はかなり可愛かったけど、本当に撃たれかねないから言つのはやめておいた。

「XX」 絶句。

「すつ、すみません！ その、あまりに衝撃的でしたので、あのっ」

五分後。正気を取り戻したクライが身振り手振りを交えてあたふたと僕達に詫びていた。

「仕方ないよ。普通の女の子は怖がってあたりまえの話だったから」

敵兵の死体に剣を突き刺していくなんて、クライのようにいかにも深窓の令嬢みたいなタイプには縁もゆかりもない話だろう。シヨックを受けて当然だ。

まあ、その……程度は別にして。

僕が苦笑していると、わずかに眉をひそめて少女が睨んできた。

「まるで私が普通ではないかのような言い方だな」

「じ、自覚なし……これは思った以上に重症だ……」

「……？ 何だ？」

言いたいことがあるなら言えとばかりに目を覗き込んでくる少女から視線を逸らし、嘆息する。基本的に人形みたいな無表情だから、じつと見つめられると結構怖いものがある。いや、機関銃を携帯している分だけ人形より怖い。

困ったように曖昧な笑みを浮かべているところを見ると、クライもそう感じている節はあるらしい。

「えーと、それで目的地とやらはまだなのかな？」

しばらく少女は物言いたげな様子だったが、やがて諦めたように

ついと前を向いて黙々と歩き始めた。

僕とクライもそれに続く。陽はもう殆ど沈みかけていて、夕暮れに染めた世界を今度は静かに夜へと誘い始めていた。

「あ。虫の音が聞こえますね」

不意にクライが嬉しそうな声を上げた。

「虫の声……？」

促されて耳を澄ませてみるが、風が草木の間を吹き抜ける細波のような音以外は何も聞こえない。

「……駄目だ、分からないな」

「ええっ、聞こえますよ。フルーシャさんはどうですか？」

クライがちよつとだけ不満そうな表情になり、前を歩いていた少女に水を向ける。

少女は少し聴覚に神経を集中させる素振りを見せたが、すぐにかぶりを振った。

「いや、私も分からない」

「ええー」

少女が不満げな声を漏らすクライをなだめるようにやわらかく微笑む。

やはりクライと話しているときは表情が豊かになるみたいだけれど、多分本人は気付いていない。

「この辺りまで来れば昆虫の数も増えてきているはずだ。クライが

聞こえるというのなら間違いないのだろう」

なるほど、これもさっき言っていた『サトロの地力』とか何とかから抜け出した影響のようだ。

そこでふと少女の妙な口ぶりに疑問を覚える。

「『クライが聞こえるというなら』って？」

僕の問いをさりげなく無視しようとする少女の代わりにクライが答えてくれた。

「わたしは見ての通り耳が良いんですよ」

「……………」

フリーズ
絶句した。

とりあえずその自慢の耳を確認してみるが、何の変哲もない普通の耳だ。身体と相応に小さくて形は整っているものの、別にうさぎやら猫やらの耳がびよこんと生えていたり集音器を装着していたりするわけではない。

僕は曖昧な微笑を浮かべたまま動揺するというシニールな状況に陥りつつ、ひとつの可能性に行き当たった——つまり、もしかするとこれはこちらの世界の慣用句ではないのか。

『足が棒になる』とか『骨が折れる』のように、陰喩や過度な表現を用いることによって字面から一段掘り下げたニュアンスを——

「クライ、その男が薄気味悪いにやけ面で変なことを考えている。気をつける」

僕を肩越しに軽蔑の眼差しで睨みながら少女が冷たい声色で呟くと、クライが一瞬怯えたような戸惑ったような表情になった。

「ど、どうしたんですかヴァクス君」

「ちよつとフルーシャさん微妙に当を得ながら誤解を生むような発言は慎んで下さい」

少女は無表情のままですつと鼻で笑って僕の抗議を一蹴し、またすたすた歩き出す。

もう本当にどうして時々突然絡んでくるんだこのひと。
気を取り直して、分からないので正直に聞いてみることにする。

「ええと、ごめんクライ、見てもよく分からなかった」

「……？ 何の話ですか？」

クライが少し小首を傾げる。関係無いけれど、こういう小動物的な仕草はクライによく似合っていた。

「ほら、さっき『見ての通り耳が良い』って……」
「……………」

数秒間の沈黙。

「ご、ごめんなさい！ わたし、たまに話を略しちゃうんです！」

その後数分にわたって、実際は『見ての通り目が見えないので、代わりに聴覚が研ぎ澄まされているから耳が良い』と言いたかったのだということを一生懸命説明された。その慌てぶりは見ていてこちらの方が可哀想になってくるぐらいで、落ち着かせるのが一苦労だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7347r/>

隻眼の黒蠍召喚師

2011年11月14日00時53分発行